

# 学校図書館の「場」としての役割

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2017年3月

佐藤優

<b>1. 序論</b>	<b>5</b>
1.1. 研究の背景と目的	5
1.2. 研究方法	6
(1) 文献研究	7
(2) 聞き取り調査	7
1.3. 本稿において用いる用語・対象の定義	7
1.3.1. 「場」	7
1.4. 本論文の構成	8
<b>2. 「場」の議論と学校図書館</b>	<b>10</b>
2.1.1. 「第三の場」としての学校図書館	10
2.2. 「ひろば」としての学校図書館	10
2.3. 心の居場所としての学校図書館	11
2.4. 2章のまとめ	11
<b>3. 「第三の場」と学校図書館</b>	<b>14</b>
3.1. 児童・生徒にとっての「第三の場」	14
3.2. 学校への要請と「第三の場」	15
3.2.1. 「社会的場所」と「第三の場」	15
3.2.2. コミュニケーション能力と「第三の場」	16
3.2.3. 学校施設の地域開放と「第三の場」	16
3.3. 学校図書館への要請と「第三の場」	17
3.4. 3章のまとめ	18
<b>4. 「第三の場」の特徴の学校図書館への適用</b>	<b>20</b>

[項目 1：中立の領域で]	20
[項目 2：サードプレイスは人を平等にするもの]	21
[項目 3：会話がおもな活動]	22
[項目 4：利用しやすさと便宜]	24
[項目 5：常連]	25
[項目 6：入りやすさ]	26
[項目 7：その雰囲気には遊び心がある]	27
[項目 8：もうひとつの我が家]	27
4.1.4 章のまとめ	29
<b>5. 「第三の場」としての学校図書館の現状に関する事例調査</b>	<b>33</b>
5.1. 調査の概要	33
5.1.1. 目的	33
5.1.2. 調査方法	33
5.1.3. 調査の対象	33
5.1.4. 調査校の概要	34
5.2. 調査結果	34
[項目 1：中立の領域で]	35
[項目 2：サードプレイスは人を平等にするもの]	36
[項目 3：会話がおもな活動]	38
[項目 4：利用しやすさと便宜]	42
[項目 5：常連]	50
[項目 6：入りやすさ]	51
[項目 7：その雰囲気には遊び心がある]	54
[項目 8：もうひとつの我が家]	57

5.3. 調査結果のまとめと考察	63
5.4. 第5章のまとめ	72
<b>6. 結論</b>	<b>74</b>
6.1. 本研究のまとめ	74
6.1.1. 学校図書館の「場」としての議論(第2章より)	74
6.1.2. 学校図書館と「第三の場」の関わり(第3章より)	75
6.1.3. 学校図書館における「第三の場」の評価項目と質問内容(第4章より)	75
6.1.4. 「第三の場」としての学校図書館の実現可能性と展望(第5章)	78
6.2. 考察	79
6.2.1. 社交の場としての役割と「第三の場」	80
6.2.2. 心の居場所と「第三の場」	81
6.2.3. 放課後の児童生徒の居場所として	81
おわりに	82
謝辞	82
《参考文献一覧》	84

## 1. 序論

### 1.1. 研究の背景と目的

近年、インターネットの普及や、電子書籍の台頭によって、紙の図書及びそれを扱う図書館の必要性の再検討が必要になってきている。F.W.ランカスターは『Libraries and Librarians in an age of electronics<sup>1)</sup>』(1982年)で、物理的な図書館が消滅すると予想した<sup>2)</sup>。このことが言われて以来、図書館は、心地よい閲覧スペースや学習スペースのデザイン、レファレンスサービスの充実、利便性の向上などを図り、図書館消滅の波に対抗しようとしてきた<sup>3)</sup>。そのような背景の中、「場としての図書館」論が活発になってきている。

学校図書館でも、この「場としての図書館」論に通じる議論がなされている。文部科学省子ども読書サポーターズ会議による「これからの学校図書館の活用の在り方等について(報告<sup>4)</sup>)」(2009)において、「心の居場所としての図書館」という言葉が使われた。「心の居場所」とは、「子どもたちが生き生きとした学校生活を送れるようにするため、また、子どもたちのストレスの高まりや、生徒指導上の諸問題への対応の観点<sup>5)</sup>」から学校全体に要請されている機能である。この機能も、蔵書や情報へのアクセスから離れた、「場としての図書館」に関連する考え方である。従来の学校図書館は「読書センター」、「学習情報センター」としての機能が重視されてきたように思われる。そのような中で、必ずしも読書・学習と関係しないこの概念が、はっきりと学校図書館に求められるようになったことで、学校図書館の場としての機能がより広がっていくきっかけとなると思われる。

しかし、文部科学省はこの「心の居場所」がどのような場所を指すかについては、「いつでも空いている図書館、必ず誰かいる図書館<sup>6)</sup>」を実現するという目標を記したのみである。また、その後文部科学省による関連調査や実践例の収集などはなされていない。平成28年度の「学校図書館の現状に関する調査<sup>7)</sup>」で学校図書館の開館時間の調査がなされたが、授業日数のうち開館日数の割合、長期休業日数のうち開館日数の割合のみの調査であり、一日のうちどのくらいの時間空いているのかは明らかにされていない。また、学校図書館担当者による「心の居場所」づくりの実践報告も少なく、実際のところ学校図書館担当者が「心の居場所」としての機能を持つと意識しているのか、どのような努力をしているのかは不明である。

学校図書館の場としての機能に関して、久野和子の「「第三の場」としての学校図書館<sup>8)</sup>」という論文がある。この論文で久野は、ある高等学校の有志による図書館企画実行委員会について、構成員が「第三の場」を創出していると述べ、図書企の創出した「第三の場」の特徴をもつ空間は、学校図書館という公共的な場の中において、安らぎの「私的領域」として生徒たちに「体験され、生きられている」生活空間と指摘した<sup>9)</sup>。また、そのような、学校図書館におけるいわゆる常連仲間だけの閉鎖的な「たまり場」、「居場所」は大きな発展の可能性を秘めていると述べた<sup>10)</sup>。久野は、人間関係資本の構築という面に目を向けていた。従来の学校図書館は、「静か」、「読書をする場所」、「勉強をする場所」といったイメージが強く<sup>11)</sup>、「人間関係を構築する場」としてのイメージはなかったように思える。そのような状況で、久野の報告は学校図書館の新たな可能性を見出したものといえる。

久野の論文で取り上げられた「第三の場」は、アメリカの社会学者 Ray Oldenburg が提唱した概念である<sup>12)</sup>。「第三の場」とは、家庭という「第一の場」、職場という「第二の場」から離れた「インフォーマルな公共生活の中核的環境」である<sup>13)</sup>。この「第三の場」という概念は、人間関係から知的活動まで、多くの機能を持っている。「第三の場」の特徴の中でも特に注目したいことは、(1)「第一の場」、「第二の場」からの避難場所としての機能を持つこと、(2)流動的な人間関係を提供する機能を持つこと、(3)一人で静かに落ち着ける場所である「個人的居場所」と人との関係性によって自己有用感などを高められる「社会的居場所」のどちらの機能をも内包できること<sup>14)</sup>の3つである。これらの特徴は、「心の居場所」を作ることにつながり、学校図書館の特徴に沿っており実現可能であると考える。

そこで本研究では、「第三の場」としての学校図書館の現状と課題を明らかにし、学校図書館の場としての役割とそのための方策を考察することを目的とする。

## 1.2. 研究方法

本研究では、(1)文献研究、(2)聞き取り調査の2つを行う。

## (1) 文献研究

本研究において、①学校図書館に求められている「場」としての役割、②学校図書館における「場」の議論、③「第三の場」の特徴とその学校図書館への適用について考察する必要がある。ここで調査した内容をもとに、学校図書館がどのような「場」を目指すべきかを考察し、そのためには他の館種での研究や、既存の研究のどのような概念が活用できるかを考察する。また、聞き取り調査の質問項目の作成や考察において参考にする。

## (2) 聞き取り調査

学校図書館文献調査で明らかにした内容をもとに半構造化インタビューを行う。主な質問項目は以下の5つである。

- (1) 学校図書館の運営状況と利用状況について
- (2) 学校図書館の利用者同士の交流について
- (3) 学校図書館で行われる利用者の会話について
- (4) 利用者が学校図書館を利用する理由について
- (5) 利用者が学校図書館の雰囲気をもとにどのように感じるか

これらの質問項目の検討は第3章で行う。

調査対象者は学校図書館担当者、学校図書館の常連の児童・生徒とする。また、調査対象校は、茨城県を中心に関東圏の私立中高一貫校とする。

## 1.3. 本稿において用いる用語・対象の定義

本節では、本研究を行うにあたって明確にしておくべき用語と対象について述べる。

### 1.3.1. 「場」

本研究のタイトルにも含まれる、「場」という言葉について、類義語としての「場所」、「空間」という言葉との意味合いの違いや、英語における「place」、「space」との対応を考察する。

本研究で取り扱う主な概念である「Third place」という概念には、「place」という英単語が使われており、日本語に訳す際には「第三の場」と訳されている。

ここで、〈空間(space)〉と〈場所(place)〉という言葉の違いについて述べている堀川三郎の「場所と空間の社会学」<sup>15)</sup>を引用する。

〈空間(space)〉とは、環境を均質で誰にとっても同じ大きさの立方体として把握することである。〈空間〉はいつてみれば透明な箱であり、何もでもなりうるもので、たとえば都市計画上の用語がこれにあたる(中略)それに対して〈場所(place)〉とは、その環境に関わる人々の価値観や付与された意味によって規定される。

これを踏まえると、〈空間〉というのはどこにどのくらいの広さがあるのか、というこ  
としか表さず、そこに関わる人がどう感じるのか、どう使うのか、どういった効果を期待  
するのかを付与したものが〈場所〉であると考えられる。本稿では、どのような働きをす  
るのかを考察するので、堀川の言う〈場所〉に近いと考える。本稿では後程考察する「第  
三の場」とそろえるために、〈場所〉という言葉を使わず、「場」という言葉を用いる。

#### 1.4. 本論文の構成

本研究の目的は、「第三の場」としての学校図書館の現状と課題を明らかにし、学校図  
書館の場としての役割とそのための方策を考察することである。

この目的のために、第二章では、文献調査として、「場」としての学校図書館の議論を  
概観する。

第三章では、文献調査によって、学校図書館へ要請される役割と「第三の場」の関わり  
を考察する。

第四章では、オールデンバーグが著書『サードプレイス:コミュニティの核になる「とび  
きり居心地よい場所」』<sup>16)</sup>で挙げた「第三の場」の特徴の、学校図書館への適応を試みた。

また、第五章では、学校図書館担当者と学校図書館の常連生徒に聞き取り調査を行い、  
「第三の場」としての学校図書館の現状を調査した。また、その結果から、学校図書館に  
「第三の場」の理論を適用することが可能か検討し、今後の課題を考察した。



《脚注》

- 1) Frederick Wilfred Lancaster. Libraries and Librarians in an Age of Electronics. Info Resources Pr, 1982, 229p.
- 2) 前掲 1)
- 3) 植松貞夫. デジタル時代の図書館建築とその施設・設備：デジタル情報時代の図書館建築:その可能性と課題. 情報の科学と技術. 2013, vol.63, no.6, p.216-220.
- 4) 子どもの読書サポーターズ会議. "これからの学校図書館の活用の在り方等について (報告)". 文部科学省. 2009-3. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/dokusho/meeting/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/08/1236373\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/_icsFiles/afieldfile/2009/05/08/1236373_1.pdf), (2017-1-9).
- 5) 前掲 4)
- 6) 前掲 4)
- 7) 文部科学省児童生徒課. "平成 28 年度「学校図書館の現状に関する調査」結果について (概要)". 文部科学省. 16-10-13. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/dokusho/link/\\_icsFiles/afieldfile/2016/10/13/1378073\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/_icsFiles/afieldfile/2016/10/13/1378073_01.pdf), (2017-1-9).
- 8) 久野和子. 「第三の場」としての学校図書館. 図書館界. 2011, vol.63, no.4, p.296-313.
- 9) 前掲 8)
- 10) 前掲 8)
- 11) 全国学校図書館協議会編. データに見る今日の学校図書館 '99~'03:学校図書館白書. 全国学校図書館協議会, 2004, 120p.
- 12) レイ・オールデンバーグ. サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」. みすず書房, 2013, 528p.
- 13) 前掲 12)
- 14) 中島喜代子, 小長井明美, 木屋真依. 世代間比較からみた子どもの居場所に関する研究:個人的居場所の場合. 三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学. 2006, vol.57, p.63-79.
- 15) 堀川三郎. 場所と空間の社会学:都市空間の保存運動は何を意味するのか. 社会学評論. 2010, vol.60, no.4, p.517-534.
- 16) 前掲 12)

## 2. 「場」の議論と学校図書館

### 2.1.1. 「第三の場」としての学校図書館

本項では、久野和子の「「第三の場」としての学校図書館」<sup>17)</sup>という論文をもとに、学校図書館における「第三の場」としての機能について考察する。

「第三の場」というのは、アメリカの社会学者 Ray Oldenburg が提唱した概念である。Oldenburg は「社会関係資本」の蓄積の場、もしくは、コミュニティの結束を強める場、新たなコミュニティを創出する場として、「第三の場」を提唱した。この「第三の場」という概念は、(1)中立、(2)平等主義などの8つの特徴を持ち、コミュニケーションなどの利益をもたらす。

久野は、ある高等学校の有志による図書館企画実行委員会である「図書企」について、構成員が「第三の場」を創出していると述べ、図書企の創出した「第三の場」の特徴をもつ空間は、学校図書館という公共的な場の中において、安らぎの「私的領域」として生徒たちに「体験され、生きられている」生活空間と指摘した。また、そのような、学校図書館におけるいわゆる常連仲間だけの閉鎖的な「たまり場」「居場所」は大きな発展の可能性を秘めているとした<sup>18)</sup>。

この「第三の場」という概念は、人間関係から知的活動まで、多くの機能を持っているが、久野の論文では、人間関係の構築という面に目を向けていた。従来の学校図書館では、「静か」「読書をする場所」といったイメージが強く、「人間関係を構築する場」としてのイメージはなかったように思える。そのような状況で、久野の報告は学校図書館の新たな可能性を見出したものといえる。

### 2.2. 「ひろば」としての学校図書館

久野の論文では、関連研究として塩見の「ひろば」論についても指摘していた。塩見のひろば論は、塩見自身が指摘した「学校図書館の中の教育力」の中で挙げられていた4つの観点のうちの一つ、「人々との交流」や「学習や研究の広がり、深まりを生み、新たな学校文化を創造するひろば」としての機能に着目したものである<sup>19)</sup>。塩見の考えでは、「資料の共有という関係が媒介となって」とあるように、学校図書館ならではの人のつな

がり方に着目している。塩見の「ひろば」論は、「ひろばとしての学習センター」とも言っているように、「第三の場」に比べると学習に着目した概念となっている。これは、「第三の場」の中の一部としてとらえられるだろう。この概念では、「学年・学級のカベ、子どもと教師の違いを超えた交流の場」とあるように、教師との関係も重視している。これは、久野の論文ではあまり言及されていなかったことである。「場」というものは、「空間」と違い、使う人、使い方等によって意味が変わる。教師との関係に着目した研究も今後なされるべきであろう。

### 2.3. 心の居場所としての学校図書館

登校拒否・不登校問題の深刻化から設置された文部省学校不適応対策調査研究協力者会議による「登校拒否(不登校)問題について一児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して一」<sup>20)</sup>で「心の居場所」という言葉が初めて用いられた(1992年3月)。心の居場所とは「自己の存在感を実感し精神的に安心していられる場所」、「自己が大事にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる」のことを言う<sup>21)</sup>。この「心の居場所」について、文部科学省の子どもの読書サポーターズ会議による「これからの学校図書館の活用の在り方等について(報告)<sup>22)</sup>」(2009)は、学校内に「心の居場所」となる場を整備してくにあたって、「自由な読書活動の場である学校図書館についても、そうした「心の居場所」としての機能を更に充実させていくことが、大きく期待されるようになってきている」と主張している<sup>23)</sup>。これに関して、小学校・中学校における心の居場所とその条件について考察した宮下(2005)の研究<sup>24)</sup>にて大学生に対して行った「居場所がある」と感じていた状況及び理由に関する質問紙調査で、小学校・中学校のどちらにも「図書室」があげられた。このことから学校図書館が、「心の居場所」として機能することの必要性が感じられる。

### 2.4. 2章のまとめ

学校図書館の「場」としての議論については、主に「第三の場」、「ひろば」論があることが分かった。久野の論文では、「第三の場」について、「人間関係の構築」という側面に着目して見ていた。また、塩見が唱えた「ひろば」論も、「人間関係」に着目していた。

人間関係という観点は、従来の図書館のイメージからは想像しにくいものであり、この2つの指摘は学校図書館に新たな機能を見出したといえる。本研究では、学習面に着目している「ひろば」論ではなく、より幅広い概念である「第三の場」について研究する。久野の論文では、生徒同士の人間関係に着目しており、生徒と教師の関係にはあまり目が向けられていなかった。また、生徒同士の関係も、「図書企」という団体の構成員同士に限定されており、「図書企」生徒と一般の利用者との関係や一般の利用者同士の関係には言及されていない。

《脚注》

17) 前掲 8)

18) 前掲 8)

19) 塩見昇ほか. 学習社会・情報社会における学校図書館. 風間書房, 2004, 296p.

20) 学校不適応対策調査研究協力者会議. "登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して—". 文部科学省. 1992-3-13. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/001/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/001/001.htm), (2016-7-28).

21) 前掲 23)

22) 前掲 4)

23) 前掲 4)

24) 宮下敏恵, 石川もよ子. 小学校・中学校における心の居場所に関する研究. 上越教育大学研究紀要. 2005, vol.24, no.2, p.783-800.

### 3. 「第三の場」と学校図書館

本章では、「第三の場」と学校図書館の関わりについて考察する。まず、児童・生徒における「第三の場」とは何かについて考察し、

#### 3.1. 児童・生徒にとっての「第三の場」

本節では、児童・生徒にとって、「第三の場」となり得る「場」を考察する。

児童・生徒にとっての「第一の場」は家庭、「第二の場」は学校ととらえられる。

オールデンバーグは著書の中で、「ラガービール園」、「パブ」などを「第三の場」の例に挙げていた<sup>25</sup>。日本での研究でも大学生を対象にした研究での「カフェ」などが「第三の場」の例として挙げられる<sup>26</sup>。どれも中学生にとっては敷居が高いと思われるものである。学校や家庭によっては、学校帰りの寄り道を禁じられている中学生にとって、①家に帰ってから何処かに出かけるか、②塾や習い事に行くかが、家と学校以外での過ごし方である。

まず、①については、友達の家、公園などが考えられる。しかし、友達の家に行くとき、その友達はまだ知り合いであるので、たいていの場合新しい人間関係は生まれない。また、公園についてもひとりで公園に行って遊ぶことは少ないと考えられるので、既に一緒に行く友達がいる場合が多いだろう。

次に、②の塾や習い事は、行く行かないがその時々気分によって決められない点でサードプレイスとは言い難い。また、塾や習い事は家庭の経済事情により、通えない児童・生徒もいるという点で、一部の児童・生徒たちにとっては得ることのできない「第三の場」になってしまう。

中学生程度の子供たちが、友達と連れ立たず、一人で行くことのできる場所としては、駄菓子屋やコンビニなどのお店が、児童館、公民館、図書館などの公共施設が考えられる。これに関して、Twitter という SNS での鎌倉市の図書館のツイートが話題となった<sup>27</sup>。当該ツイートを下に引用する。

鎌倉市図書館 @KAMAKURA\_TOSYOK

もうすぐ二学期。学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしやい。マンガもライトノベルもあるよ。一日いても誰も何も言わないよ。9月から学校へ行くくらいなら死んじゃおうと思ったら、逃げ場所に図書館も思い出してね。

2015年8月26日 09:11

このツイートは、学校教育と図書館を管轄する鎌倉市教育委員会内部で学校教育を軽視している「不適切な表現では」と議論になったが、「子供たちに自殺しないでほしいという思いで書いたもの」と説明したところ、削除しないことが決定した<sup>28</sup>。このツイートには賛同のコメントが多く寄せられ、SNS内の引用機能であるリツイートは99,473件、SNS内の同意の意思を示す機能であるいいねは79,330件にもものぼり、多くの人の目に触れた。人々の中で不登校問題と公共図書館が結びつくきっかけとなったのではないか。

### 3.2. 学校への要請と「第三の場」

ここでは、学校へ求められている機能と「第三の場」の関係を考察し、学校内に「第三の場」があることの意義、学校が「第三の場」を提供する努力をすることの必要性を考察する。

#### 3.2.1. 「社会的場所」と「第三の場」

「心の居場所」という言葉に使われている、「居場所」についての研究では、「居場所」を、他者との関わりで分類しているものがある。この、他者との関わりという視点について、石本(2010)は「個人的居場所を確保することでは精神的健康を高めることはできず、社会的居場所を確保することによってのみ精神的健康が高められること」、「社会的居場所の確保と本来感や自己有用感の間には有意な正の相関がいられたが、個人的居場所の確保と本来感、自己有用感の間には有意な相関がみられない」ことを指摘している<sup>29</sup>。

ここで、「第三の場」が「交流」、「会話」、「もうひとつの我が家のような雰囲気」、「元気を取り戻す」などのキーワードで語られることに着目したい。「第三の場」は、単に「第一の場」、「第二の場」からの逃げ場所を提供するのみの場所ではなく、他者との関わりが不可欠である。この点において、「第三の場」を作ることは、「社会的居場所」としての「心の居場所」を作ることにつながるのではないかと考える。

### 3.2.2. コミュニケーション能力と「第三の場」

文部科学省の「コミュニケーション教育推進会議」は、「国際社会を生き抜く異文化コミュニケーション能力」、「社会に出てから最初に直面する世代間コミュニケーションの問題を克服する能力」、「楽しい学校生活を送るために、いじめや、キレるという現象をできる限り少なくするような人間関係を形成していく能力」など、多様なコミュニケーション能力は、いずれもこれからの時代を生きる子どもたちにとっての基礎的な能力となっていると述べている<sup>30)</sup>。しかし、子どもたちの現状としては、気の合う限られた集団でのみのコミュニケーションをとる傾向が見られ、コミュニケーションをとっているつもりが実際は自分の思いを一方向的に伝えているにすぎない場合が多いなどの指摘がある<sup>31)</sup>。

「第三の場」は、コミュニケーションに着目した「場」である。「第三の場」は、児童・生徒のコミュニケーション能力の育成に寄与することができるのではないか。

### 3.2.3. 学校施設の地域開放と「第三の場」

学校教育法・社会教育法は、学校施設の地域開放について、以下のように述べている。

#### *学校教育法 137 条 (学校施設の社会教育への利用)*

*学校教育上支障のない限り、学校には、社会教育に関する施設を附置し、又は学校の施設を社会教育その他公共のために、利用させることができる。<sup>32)</sup>*

#### *社会教育法 44 条 (学校施設の利用)*

*学校(国立学校又は公立学校をいう)の管理機関は、学校教育上支障がないと認める限*



り、その管理する学校の施設を社会教育のために利用に供するように努めなければならない。<sup>33</sup>

また、また、文部科学省・厚生労働省が共同で進めている放課後子ども総合プラン<sup>34</sup>というものも、放課後の児童・生徒の居場所の提供を目標としている。

### 3.3. 学校図書館への要請と「第三の場」

「2.3. 心の居場所としての学校図書館」で述べた通り、学校図書館にも「心の居場所」としての機能が要請されている。また、先行研究からも児童・生徒が学校図書館を心の居場所として意識していることが分かる。さらに、宮下(2005)の研究<sup>35</sup>)では、児童生徒が学校図書館を心の居場所と感じる因子として、小学校では、同じ時間を過ごすことのできる他者の存在という「他者の存在」因子、居場所を意識して求めている「しがみつき」因子、他者からものごとを強制されることがなくマイペースに時間を過ごすことができるという「マイペース」因子を挙げた。また、中学校では、安心して気を使わずに過ごすことができる「気楽な感覚」因子、自分と他者が同じ目標や方向を向いているという「目標・対象の共有」因子、居場所を意識して求めているという「しがみつき」因子を挙げた。

「他者の存在」、「目標・対象の共有」は他者との交流を前提としているため、学校図書館は個人的居場所だけではなく、社会的居場所としてもとらえられていると考える。「3.2.1. 「社会的場所」と「第三の場」」で述べた通り、社会的居場所と「第三の場」は働きが似ており、「第三の場」を目指すことで社会的居場所としての機能も期待できる。

このように学校図書館は、「自己の存在感を実感し精神的に安心していられる」、「自己が大事にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる」児童・生徒の「心の居場所」として必要とされている。そして、そのためには特に社会的居場所としての機能を持つことが重要である。

また、コミュニケーション能力に関しても、気の合う限られた集団でのみのコミュニケーションをとる傾向が危惧されているが、学校図書館は、学級・学年の仕切りを超えたコミュニケーションを期待できる。普段の友達とは違う関係性の中でコミュニケーションを

行うことで、コミュニケーションに対する自信をつけることができるのではないかと考える。

また、学校施設の地域開放についても、学校図書館にその要請がなされている。「文部科学省事業評価書－平成 21 年度新規・拡充等－16.学校図書館の活性化推進総合事業（新規）<sup>36)</sup>」では以下のように述べられている。

*児童生徒の安全・安心な居場所づくりという観点から、放課後の学校図書館を地域の小学生等に開放していくことが求められている。また、異校種の児童生徒や地域住民にも開放することにより、学年、世代を超えた様々な人々が読書・本を媒介として出会う交流の場としての活用を、より一層促進することができる。学校図書館については、このような放課後開放を進め、放課後における読書活動等を展開することにより、児童生徒の読書センターとしての機能をより有効に発揮することが期待される*

このことより、学校図書館は放課後の児童・生徒の居場所として望まれていることが分かる。

以上のことから、前述の「第三の場」に関連する学校への要請は、学校図書館で請けおるべき責務であると考ええる。

### 3.4. 3章のまとめ

(1)児童・生徒の居場所として公共図書館が考えられること、(2)学校内にも「第三の場」のような「場」が求められていることが分かった。これに関して、児童・生徒が自分の力で「第三の場」を見つけることを期待するだけでなく学校が「第三の場」を提供できるように努力する必要もあると考える。また、生徒が学校にいる間も、放課後一度家に帰らずとも訪れることができ、家庭の事情や自宅の立地、金銭的問題などの格差が生じにくいという点も考え、学校内に備わっている施設に着目することとした。その中でもそれらの要請が求められていることが明確である学校図書館に着目する。

《脚注》

- 25) 前掲 12)
- 26) 高田房枝, 若林直子, 小島隆矢. サードプレイスの再定義と類型化の指針に関する検討. 日本建築学会大会学術講演梗概集. 2015, vol.2015, no.9, p.35-36.
- 27) 鎌倉市図書館. "鎌倉市図書館のツイート". Twitter. 2015-8-26. [https://twitter.com/kamakura\\_tosyok/status/636329967668695040?ref\\_src=twsrc%5Etfw](https://twitter.com/kamakura_tosyok/status/636329967668695040?ref_src=twsrc%5Etfw), (2017-1-9).
- 28) Chika Igaya. "鎌倉市図書館のツイート「学校がつらい子は図書館へ」 一時は削除も検討". THE HUFFINGTON POST. 2015-8-27. [http://www.huffingtonpost.jp/2015/08/26/kamakurashi-library\\_n\\_8046562.html](http://www.huffingtonpost.jp/2015/08/26/kamakurashi-library_n_8046562.html), (2017-1-9).
- 29) 石本雄真. こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所:精神的健康および本来感、自己有用感との関連から. カウンセリング研究. 2010, vol.43, no.1, p.72-78.
- 30) 文部科学省コミュニケーション教育推進会議. "子どもたちのコミュニケーション能力を育むために:「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組". 文部科学省. 2011-8-29. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/08/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/__icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607_2.pdf), (2017-1-9).
- 31) 前掲 30)
- 32) 学校教育法 137 条 (学校施設の社会教育への利用)
- 33) 社会教育法 44 条 (学校施設の利用)
- 34) 文部科学省, 厚生労働省. "放課後子ども総合プランについて:学校・家庭・地域をつなぐ". School home community:学校・家庭・地域をつなぐ. ○-○-○. <http://manabi-mirai.mext.go.jp/houkago/propulsion.html>, (2017-1-9).
- 35) 宮下敏恵, 石川もよ子. 小学校・中学校における心の居場所に関する研究. 上越教育大学研究紀要. 2005, vol.24, no.2, p.783-800.
- 36) 文部科学省. "文部科学省事業評価書－平成 21 年度新規・拡充等－16.学校図書館の活性化推進総合事業 (新規)". 文部科学省. 2008-8. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/hyouka/kekka/08100105/004/016.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100105/004/016.htm), (2017-1-9).

#### 4. 「第三の場」の特徴の学校図書館への適用

本章では、オールデンバーグが著書「サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地のいい場所」」の第2章で「世界各地のサードプレイスには共通する本質的な特徴がある<sup>37)</sup>」と述べている。ここで述べられている「第三の場」の特徴について、学校図書館というフィールドで考える際にはどのようにとらえればいいかを考察する。考察するにあたって、学校図書館の実践報告が多く載っている機関紙「学校図書館」を参考にした。この項目を、聞き取り調査をする際の枠組みとする。考えた質問項目については、筑波大学大学院の図書館情報学研究科において、学校図書館に関する研究を行っている平久江祐司研究室のゼミで発表し、平久江祐司教授やゼミ生からの批判を受け修正をしたほか、現職の学校図書館担当者に一度回答してもらい、フィードバックを得て修正した。

##### [項目1：中立の領域で]

まずは、「中立の領域《ニュートラル・グラウンドで》」について考察する。オールデンバーグが「友達が数限りなくいて頻繁に会えるのは、互いの仲間に加わることやそこから抜けることがしやすい場合に限られる<sup>38)</sup>」、「わたしたちは自分の一番好きな仲間から逃れることが大いに必要だ<sup>39)</sup>」、「社会学者リチャード・セネットの言葉を借りれば、「人は、互いに相手から身を守る何らかの手段を持っているときにしか社会的になれない」<sup>40)</sup>」とやっているように、教室でいつも一緒にいるメンバーや、部活の仲間だからこそ心が落ち着かないことがあるだろう。特に小学校・中学校時代は、友達に話を合わせておかないと嫌われてしまったり、仲間外れにされたりするのではないかと不安に思ってしまうこともあるのではないか。オールデンバーグは「都市とその近隣住区が、わたしたちにその可能性を約束しているとおりに豊かで多様な交流を提供するには、人の集まってくる<中立の領域>がなければならない<sup>41)</sup>」と述べている。学校生活における仲間として「クラスメイト」、「部活仲間」、「生徒会仲間」、「委員会仲間」などが考えられるが、これらは所属、脱退を気軽にできるものではない。特に、学級は自分の意志に関わらず決められたところに所属しなければいけない。先ほど挙げた「クラスメイト」を主に受け入れる「ホームルーム教室」、「部活仲間」を受け入れる「部室」やコートなどの「活動場所」、「生徒会仲間」や「委員会仲間」を受け入れる「委員会の教室」や「活動場所」と比べると、学校図書館

は児童生徒にとって中立の領域と呼ぶことができるのではないか(ただし、図書委員の生徒にとっては活動場所と成ることはある)。このような中立の場所である学校図書館が、普段否応なしに関わらなければいけない「クラスメイト」や「部活仲間」、「生徒会仲間」、「委員会仲間」ではない児童生徒との豊かで多様な交流を提供することができるという特徴を持っているか、持つことができるかを検討したい。以上のことを踏まえて、学校図書館においてこの項目については以下の評価項目と質問項目を設定する。

[評価項目 1]

- ① 関係性の拘束性がないこと
- ② 所属・脱退の概念がないこと
- ③ 多様な人との交流ができること

[質問 1] 仲良しグループのようなまとまり同士でなく、別々に訪れた利用者同士が関わることはありますか？エピソードがあったら教えてください。

例としては、

- ・ 普段はおとなしい A さんが元気なイメージの B さんとお話をしていた
- ・ あまり女の子としゃべらない B 君が女の子と話していた
- ・ クラスも部活も違う児童生徒同士の集まりが勉強を教えあっていた

などが挙げられる。

## [項目 2：サードプレイスは人を平等にするもの]

次に、「サードプレイスは人を平等にするもの<sup>レヴェラー</sup>」という項目について考察する。レヴェラーとは、チャールズ一世の治世に出現した階級や身分の差の撤廃を目指した政党である「水平派」のことであり、転じて「人を平等にする」ものやひとを指すようになった<sup>42)</sup>。この節ではサードプレイスが「誰でも受け入れること」とそれによる恩恵について書いている。誰でも受け入れられ、職業や身分、世間の評価などをとっぱらった付き合いの中で、普段の対人関係の中で演じている「相応の役」から解き放たれ、「当人の人柄の魅力や雰囲気そのもの」が評価される<sup>43)</sup>。小学生や中学生は職業などによる差別はないだろうが、ここでは学年の上下等に注目してみたいと思う。部活やクラブに入っている児

童・生徒は先輩や後輩とも気軽に関わることができるだろうが、そうでない生徒は委員会等以外では先輩や後輩と話す機会もないであろう。サードプレイスは世代間の交流という面での効能も期待されているので、そのような生徒も委員会のような責任のある場面でのやりとりだけではなく、学校生活での悩みや進路相談など気軽な付き合いをできるとよい。もしも、学校図書館に様々な学年の利用者が一緒にいて、この項目の平等が達成されたならそれが可能だろう。そこで学校図書館においてこの項目については、以下の質問項目を設定する。

[評価項目 2]

- ① 必要以上の上下関係がないこと
- ② 上下関係を越えた交流があること

[質問 2] 学年を超えた交流や、児童生徒と教員・職員の交流が起こることはありますか？エピソードがあったら教えてください。

例としては、

- (1) 3年生が1年生に勉強を教えていた
- (2) 教員と生徒が好きな本について話していた

などが挙げられる。

### [項目 3：会話がおもな活動]

次に、「会話が主な活動」という特徴について考える。題の通り、会話が主な活動かどうかという話なのだが、サードプレイスでなされる会話にはいくつかの特徴がある。まず、会話のルールが守られているということだ。一定の人が話しすぎるといこともなく、他人の感情を害さないような言い回しをしたり、自分の個人的なことなど誰もが関心をもつ話題でないものは避けたりなど楽しく会話ができるように誰もが心がけている<sup>44)</sup>。また、身分によって話す内容や量が決められることもない。このような状況の中で会話のルールを守らずに自分勝手に話す人は「ボア」と呼ばれ敬遠されることとなる<sup>45)</sup>。前の2項目で言及した、気楽に付き合ってもいい、誰でも平等という特徴の半面で、いくら偉かろうと気に入らなければ付き合わなくてもよいのだ。普段しゃべっている友達だけと話すの

では、この会話のルールが学べないだけでなく、自分がルールを守れていないことに気付かないまま成長してしまう。前述のとおり、児童・生徒が仲良しグループ以外でコミュニケーションが取りにくい傾向にあることは文部科学省も問題視していることである<sup>46)</sup>。しかし、学校図書館には「静かに読書を楽しみたい」、「集中して勉強したい」という生徒のために、静かにするようにルールが設けられている学校図書館もあるだろう。まず、学校図書館において会話がどの程度許されているか、状況を確認する必要がある。

この項目を学校図書館において聞く際には、以下の項目を設定する。

[評価項目 3]

- ① 会話にマナーや節度があること
- ② 楽しい会話が行われていること

[質問 3-a] あなたの学校の学校図書館は、学校図書館内の会話についてのルールを設けていますか？

[質問 3-b] あなたの学校の学校図書館では、どのような会話がされていますか？

例としては

- ・学校図書館内全体で普通の声の大きさでおしゃべりしてもよい
- ・学校図書館内全体で小さな声でならおしゃべりしてもよい
- ・内容によってはおしゃべりしてもよい
- ・おしゃべりをしてよい場所と、静かにする場所を分けている

などが挙げられる。

また、その内容についても詳しく聞き、会話の内容で多いものや、どのようなグループがどのような会話をしているかを詳しく聞けるとよい。例えば、「学年を隔てた会話ができ、進路関係の本がある図書館では進路の話が出ることが多い」という知見が得られれば、進路の資料を充実させる、OB・OGを呼んで進路相談会をするなど、更に会話を活発にする手がかりとしたい。また、会話をしている様子について、「楽しい雰囲気だったか/真面目な雰囲気だったか」、「一方的な相談のようだったか/お互いに話題を提示していたか」、「会話をして元気になったようか/喧嘩のように会話が終わってしまったか」などを、話題によって適宜質問したい。

#### [項目4：利用しやすさと便宜]

次に「利用しやすさと便宜」と題された節について考える。このトピックについては「時間」と「場所」の2つが関わってくる。サードプレイスは家や学校・職場のように「行かなければいけなくて行っている場所」ではない。なので、学校や職場などで果たすべきことがないときにしか行けない。また、サードプレイスが必要になるシーンは人によっても違うだろう。ある人にとっては職場での人間関係に疲れた仕事帰りかもしれない。ある人にとっては、家族サービスに疲れた日曜の夕方かもしれない。サードプレイスはなるべく長時間開いていなければならないのだ。学校に通う児童・生徒にとっては、電車の時間の関係で早く来ざるを得なかった始業前、クラスに気の合う人がいなくて退屈な長休み、仲がいい友達が部活に行ってしまうと寂しい放課後などのシチュエーションが考えられる。また、場所の便利さについては、それが損なわれると「そこまで行くのが面倒くさい」、「ひいきの客たちと親しくなれそうにない」という理由で、サードプレイスの魅力が損なわれてしまうとオールデンバーグは述べている<sup>47)</sup>。「ひいきの客たちと親しくなれそうにない」については、見ず知らずの遠い土地で落ち着いて他者とコミュニケーションができるかを考えるとわかるだろう。しかし、学校図書館については利用者が同じ学校に通っているので考えなくてもよさそうだ。「そこまで行くのが面倒くさい」と思われるのを防げばいいだろう。学校図書館の場所については「学校図書館憲章<sup>48)</sup>」で、「学校図書館は、利用しやすい場所に専用の施設として設置する」とされていることより、多くの学校図書館は利用しやすい場所に設置されているはずで、この項目を満たすべきであり、満たしている図書館は多いと考える。

以上をふまえて学校図書館でこの項目について、以下の質問を設ける。

##### [評価項目4]

- ① 生徒の行きたい時間に開いていること
- ② 生徒にとって立ち寄りやすい立地にあること



[質問 4-a] あなたの学校図書館の、時間帯別の状況を教えてください。

※《始業前》《休み時間》《授業時間中(図書館を使うことが前提となっている授業は除く)》《昼休み》《放課後》のそれぞれについて、開館しているか、図書の貸出は可能か、学校図書館担当者はいるか、図書委員はいるかを聞く。

[質問 4-b] 前の質問であげた時間以外で、生徒の要望に合わせて開館時間を工夫している例はありますか？

[質問 4-c] あなたの学校の学校図書館は、生徒が立ち寄りやすい位置にありますか？  
また、立ち寄りやすいような工夫がされていますか。

[質問 4-b] についての例は、

- ・ 土曜日に授業がある日は開館するようにしている
- ・ 放課後の開館時間は、バス通学の生徒が帰る時間を参考に決めている

などが挙げられる。

[質問 4-c] についての例は、

- ・ 学校の中心の位置する
- ・ 玄関から教室に向かう間など生徒の動線上に位置する

などが考えられる。

## [項目 5：常連]

次に、「常連」と題された節について考える。この節に関しては、サードプレイスには「その場所に特色を与え、いつ訪れても誰かしら仲間がいることを確約してくれる<sup>1)</sup>」常連が必要だということが大部分だ。そして、その常連はサードプレイスに訪れる新参加者を受け入れ、その多様な人づきあいの核の部分となる。サードプレイスは多様な人づきあいを楽しむところといっても毎日初対面の人と話しなればいけないのでは疲れてしまう。この項目については、以下の質問を設ける。

[評価項目 5]

- ① 常連がいること
- ② 常連によって雰囲気形成がされていること
- ③ 常連同士が結束し合って新参加者が介入しにくい空気を作っていないこと

[質問 5] あなたの学校の学校図書館には、定期的に訪れる生徒がいますか？図書委員会の仕事や、調べ学習の課題等で訪れざるを得なくて訪れている生徒は除きます。

ここで注意したいのは、常連にはお店のマスターなど、その場所の主のような立場は含まれないということだ。本稿では、学校図書館担当者をそれと同じように扱い、常連には含まないこととする。

### [項目 6：入りやすさ]

次に、「目立たない存在」と題された節について考える。アクセスがよくてもその建物や部屋自体に入りにくいのであれば人は集まらないだろう。この項目については「目立たない」というより、文中で使われている「銜いのない」という表現がよいと考える。本論文では「入りやすさ」として広くとらえようと思う。たとえ目立たない存在だったとしても、入り口が閉鎖的で入りにくいのはいいけない。学校図書館で特に問題になりそうなのは「真面目な雰囲気」や「読書をする人の場所というイメージ」だろう。こういったイメージを払拭するために「勉強をするスペース」、「おはなしをするスペース」を分ける取り組みを行っている学校図書館も報告されている<sup>2)</sup>。そこで、学校図書館においてこの項目について聞くときには、以下の質問を設ける

#### [評価項目 6]

①生徒にとって立ち寄りやすい雰囲気であること

[質問 6] あなたの学校図書館は児童・生徒が気軽に立ち寄りやすいと思うか。また、なぜそう思うか。どのような工夫をしているか。

例としては、

- ・読書を目的とした児童・生徒以外も入りやすいように、「おしゃべりコーナー」、「くつろぎコーナー」など、読書以外のこともしていいとはっきり分かるようなスペースを作っている。
- ・作り方が気になるような飾りつけ(折り紙など)をし、館内に作り方の紙を置いて館内に誘導するようにしている。

・扉や壁などがなく、自分から扉を開ける緊張感をなくしている。

などが挙げられる。

### [項目7：その雰囲気には遊び心がある]

次に「その雰囲気には遊び心がある」と題された節について考える。この「遊び心」について、オールデンバーグはただの会話も含んでいるので、要は利用者が楽しそうにしているかに注目すれば良いであろう。楽しんでいるかどうかは児童・生徒本人にしかわからないことであり、いずれは生徒に学校図書館にいるときの感情を直接聞くような調査も必要であるが、本研究ではその前段階として、学校図書館担当者が自分の担当する学校図書館を児童・生徒が楽しんでいると感じているかどうかを聞きたいと思う。そう思えていなかったら児童・生徒に楽しいかどうかを聞いても楽しいという答えは返ってこないだろう。

この項目については、以下のような評価項目と質問項目を設ける。

[評価項目7]

①楽しい雰囲気を持っている

[質問7] あなたの学校図書館では、児童・生徒は楽しそうにしているか。どのようなときに楽しそうにしているか。

詳しく、どのようなメンバーで、どんなことをしているのか聞きたいと思う。児童・生徒が内輪で楽しんでいる事例、学校図書館で行われるイベントを楽しんでいる事例、どちらも収集したいと思う。学校図書館内で行われるイベントとして、機関紙「学校図書館」で報告された事例の中では、「音楽会を開く」、「ブックトーク」や「読書会」、「ビブリオバトル」などが報告されている。

### [項目8：もうひとつの我が家]

もうひとつの我が家という項目について、オールデンバーグは心理学者デイヴィット・シーモンの著書から引用し、「もう一つの我が家」の評価について述べている。その5つの評価項目は、①わたしたちを根付かせる、②私物化、③元気を取り戻せる、④気楽な感じ/存在の自由、⑤ぬくもりである。①は、定期的に訪れたいくなる、訪れているということ

である。この点に関しては、[5]の「常連」という項目で、定期的に訪れているか聞いているため、ここでは省略する。②の私物化はその場所を「私たちの場所」、「私の図書館」などと呼びたくなるということである。③は気力を取り戻す、緊張をほぐせる場所であるということである。④は積極的に個性を表現したり、環境内での自己主張をしたりしやすいということである。家では、家具を自由に選ぶことなどで、自分の好きにふるまうという気持ちよさを味わうことができる。これと同じように、サードプレイスでは、しゃべりたい人としゃべる、自分の好きなことをしてくつろぐなどの行動で示される。⑤のぬくもりは、友情や支援や相互の気遣いによって生まれるものである。家ではそれは家族としての愛情からくるものであるが、サードプレイスでは他人から受け取るものなので、また違ったぬくもりがあるだろう。家族には気をつかえないことでも、他人には気をつかうということはよくあることだ。以上をまとめて、この項目の評価項目と質問は以下の通りとする。

【評価項目 8】

- ① 児童・生徒にとって自分たちの居場所という感覚がある
- ② 児童・生徒が元気を取り戻せる場所である
- ③ 児童・生徒が思い思いのことをして過ごせる
- ④ 利用者同士がルールを守ることができている

【質問 8-a】 あなたの学校図書館は、児童・生徒に「自分たちの居場所」と思われている、と思いますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。

【質問 8-b】 あなたの学校図書館は、児童・生徒にとって元気を取り戻せる場所だと思いますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。

【質問 8-c】 あなたの学校図書館は、児童・生徒が思い思いのことをして過ごせていますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。

【質問 8-d】 あなたの学校図書館では、利用者同士がルールを守り、お互いを気遣って行動できていますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。

#### 4.1. 4章のまとめ

本研究では、その学校図書館が「第三の場」かどうかを測る質問として、以下の項目を設定した。並べてそれぞれの評価ポイントを示す。

表1 学校図書館における「第三の場」としての評価項目と質問項目

項目番号	評価項目	質問項目
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 関係性の拘束性がないこと</li> <li>② 所属・脱退の概念がないこと</li> <li>③ 多様な人との交流ができること</li> </ul>	<p>[質問 1] 仲良しグループのようなまとまり同士でなく、別々に訪れた利用者同士が関わることはありますか？エピソードがあったら教えてください。</p>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 必要以上の上下関係がないこと</li> <li>② 上下関係を越えた交流があること</li> </ul>	<p>[質問 2] 学年を超えた交流や、児童生徒と教員・職員の交流が起こることはありますか？エピソードがあったら教えてください。</p>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 会話にマナーや節度があること</li> <li>② 楽しい会話が行われていること</li> </ul>	<p>[質問 3-a] あなたの学校の学校図書館は、学校図書館内の会話についてのルールを設けていますか？</p> <p>[質問 3-b] あなたの学校の学校図書館では、どのような会話がされていますか？</p>

4	<p>① 生徒の行きたい時間に開いていること</p> <p>② 生徒にとって立ち寄りやすい立地にあること</p>	<p>[質問 4-a] あなたの学校図書館の、時間帯別の状況を教えてください。</p> <p>※《始業前》《休み時間》《授業時間中(図書館を使うことが前提となっている授業は除く)》《昼休み》《放課後》のそれぞれについて、開館しているか、図書の貸出は可能か、学校図書館担当者はいるか、図書委員はいるかを聞く。</p> <p>[質問 4-b] 前の質問であげた時間以外で、生徒の要望に合わせて開館時間を工夫している例はありますか？</p> <p>[質問 4-c] あなたの学校の学校図書館は、生徒が立ち寄りやすい位置にありますか？また、立ち寄りやすいような工夫がされていますか。</p>
5	<p>① 常連がいること</p> <p>② 常連によって雰囲気形成がされていること</p> <p>③ 常連同士が結束し合っ て新参加者が介入しにくい 空気を作っていないこと</p>	<p>[質問 5] あなたの学校の学校図書館には、定期的に訪れる生徒がいますか？図書委員会の仕事や、調べ学習の課題等で訪れざるを得なくて訪れている生徒は除きます。</p>
6	<p>① 生徒にとって立ち寄りやすい雰囲気であること</p>	<p>[質問 6] あなたの学校図書館は児童・生徒が気軽に立ち寄りやすいと思うか。また、なぜそう思うか。どのような工夫をしているか。</p>

7	①楽しい雰囲気を持っている	[質問7] あなたの学校図書館では、児童・生徒は楽しそうにしているか。どのようなときに楽しそうにしているか。
8	① 児童・生徒にとって自分たちの居場所という感覚がある ② 児童・生徒が元気を取り戻せる場所である ③ 児童・生徒が思い思いのことをして過ごせる ④ 利用者同士がルールを守ることができている	[質問8-a] あなたの学校図書館は、児童・生徒に「自分たちの居場所」と思われている、と思いますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。 [質問8-b] あなたの学校図書館は、児童・生徒にとって元気を取り戻せる場所だと思いますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。 [質問8-c] あなたの学校図書館は、児童・生徒が思い思いのことをして過ごせていますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。 [質問8-d] あなたの学校図書館では、利用者同士がルールを守り、お互いを気遣って行動できていますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。

このように、「第三の場」の特徴から、学校図書館が「第三の場」であるかどうかを測るための質問を考えることができた。このことから、学校図書館が「第三の場」となることができるのではないかと予測できる。この質問項目と調査項目を用いることで、学校図書館は「第三の場」となることが可能なのかを考察したいと考える。また、この調査項目を使用した調査の結果によって、この項目が学校図書館の「第三の場」としての適合性を測るのに有用化を考察したいと考える。

《脚注》

- 37) 前掲 12) p.64
- 38) 前掲 12) p.67
- 39) 前掲 12) p.67
- 40) 前掲 12) p.67
- 41) 前掲 12) p.68
- 42) 前掲 12) p.70
- 43) 前掲 12) p.70
- 44) 前掲 12) p.76
- 45) 前掲 12) p.78
- 46) 前掲 30)
- 47) 前掲 12) p.83-84
- 48) 全国学校図書館協議会. "学校図書館憲章". 全国学校図書館協議会. 2016-6-3. <http://www.j-sla.or.jp/material/sla/post-33.html>, (2017-1-9).



## 5. 「第三の場」としての学校図書館の現状に関する事例調査

本章では、「第三の場」の概念が学校図書館へ応用可能かどうかを考察するために行った、学校図書館担当者及び学校図書館の常連生徒への聞き取り調査の結果を述べる。

### 5.1. 調査の概要

#### 5.1.1. 目的

第4章では、オールデンバーグが提唱した「第三の場」の特徴をもとに、学校図書館が目指す「第三の場」を考察した。この調査では、それが現状において実現できているか、今後実現可能か、実現の障壁となっているものは何か、どのような取り組みによって実現可能かを考察することを目的とする。

#### 5.1.2. 調査方法

質問項目を作成し、学校図書館担当者及び学校図書館の常連生徒への聞き取り調査を行った。聞き取り調査は、学校図書館担当者及び学校図書館の常連生徒3~5名に対しての半構造化のフォーカス・グループ・インタビューの形で行った。学校図書館の常連生徒は、事前に学校図書館担当者が選び、声をかけ、当日集まった生徒を対象とする。聞き取り調査の時間は20~30分程度を目安とした。なお、本調査は、開始前に学校図書館担当者に対して、調査の参加同意書への署名の記入を任意で依頼した。また、学校図書館の常連生徒に対して、調査の参加同意書への署名の記入を任意で依頼した上、責任者として学校図書館担当者にも署名を依頼した。

#### 5.1.3. 調査の対象

調査の対象は、関東圏の私立中高一貫校の中学生とした。関東圏を対象とした理由は、実際に学校図書館を訪問することが可能であるためである。また、私立・公立ともに交渉したところ、私立の方が生徒への調査に関して寛容であったため、私立学校を対象とした。その中でも、専任の司書教諭や学校司書を雇用していると事前に分かっている学校を

優先して依頼を行った。生徒を集めるため調査数を多く確保することが困難であるので、複数の校種の比較は行わないこととした。校種は、専任の司書教諭複数人おり、週5日勤務で学校司書を雇用している、一番条件のいい学校が中高一貫であったので、中高一貫校で統一した。調査対象を中学生とした理由として、「心の居場所」に関する先行研究が多いこと、小学生から高校生まで成長するちょうど中間の期間であることを挙げる。

#### 5.1.4. 調査校の概要

A 中学校と C 中学校は、同都道府県の違う市である。B 中学校は、A 中学校・C 中学校とは違う都道府県の中学校である。

##### [A 中学校]

専任の司書教諭 2 人、学校司書 1 人で運営。

専任の司書教諭 1 人と、生徒 5 人に質問。

##### [B 中学校]

専任の学校司書 2 人で運営。

専任の学校司書 1 人と、生徒 4 人に質問。

##### [C 中学校]

専任の司書教諭 2 人、学校司書 1 人で運営。

専任の司書教諭 1 人と、生徒 3 人に質問。

#### 5.2. 調査結果

本節では、聞き取り調査の結果を述べる。質問項目ごとに各学校の際を比較し、考察を述べる。なお、回答者の属性や特徴は、その発言の考察の際に必要な場合以外は語らないこととする。

[項目1：中立の領域で]

この項目の質問は、

[質問 1] 仲良しグループのようなまとまり同士でなく、別々に訪れた利用者同士が関わることはありますか？エピソードがあったら教えてください。

である。

質問への回答の概要を表2に示す。

表2 [項目1：中立の領域で]についての回答

A校	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ あまりない</li> <li>◎ 図書委員枠・博士課程前期2年での仲良し枠・部活枠内での交流が多い</li> </ul> <p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ あまりない</li> <li>◎ 同級生や部活の仲間など、もともと知っている生徒同士ならしゃべることがある</li> <li>◎ 1人で来て、1人でずっと過ごすことが多い</li> </ul>
B校	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 1人で来て、1人でずっと過ごすことが多い</li> </ul>
C校	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ もともと知っている生徒同士ならしゃべることがある</li> <li>◎ 友達と来たときは、他の人に話しかけずその友達とずっと過ごす</li> </ul>

上の結果のように、学校図書館を訪れて知り合いに会うと会話が始まることが多いが、学校図書館で今まで知り合いではなかった生徒と会話が始まることはほとんどないようだ。A校の生徒は、「クラスが離れてしまった子と久しぶりに図書館で会うと、最近どう？など近況について雑談することがある」と述べた。このように学校図書館は、普段同じのコミュニティには属していないが、知り合いである生徒同士の社交の場とはなっているようだ。また、A校の学校司書は「図書委員の先輩Aさん・後輩Bさんが話しているところ

に、後輩 B さんの友達の C さんが参加するなどという例はあった」と述べた。図書委員会という組織がミキサーとなって、新しい人間関係を広げることは可能であるとする。

最後に、この項目での知見を箇条書きでまとめる。

- (1) 学校図書館は、普段はあまり話すことができない既知の生徒同士の社交場となることがある
- (2) 図書委員会という組織がミキサーとなって、新しい人間関係を築くことがある

[項目 2：サードプレイスは人を平等にするもの]

この項目の質問は、

[質問 2] 学年を超えた交流や、児童生徒と教員・職員の交流が起こることはありますか？エピソードがあったら教えてください。

である。

この項目についての回答を表 3 に示す。

表 3 [項目 2：サードプレイスは人々を平等にするもの]についての回答

A 校	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 知っている先生なら話す</li> <li>◎ 司書(司書教諭)の先生となら話す</li> <li>◎ 内容：雑談/おすすめの本</li> <li>◎ 以前教科担任だった歴史の先生と話す</li> <li>◎ 内容：雑談(新しいクラスが楽しいという報告等)</li> </ul>
B 校	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 部活の先輩となら話す</li> </ul>
C 校	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 図書館の先生となら話す</li> <li>◎ 内容：おすすめの本/雑談/悩み相談</li> </ul>

この項目についても、もともと知り合いだった先生・先輩となら話すという回答があった。

また、司書や司書教諭とは、図書館内で知り合い、親しくなっていくことになるが、A校の司書教諭は、図書委員の生徒は委員会で、図書委員ではない生徒は貸出の手続きの際に話しかけたときや、レファレンスに答えるときに親しくなると述べた。司書・司書教諭との関係については、3校とも違った特徴があった。A校では、常に学校図書館に複数の学校図書館担当者があり、担当者同士が楽しく会話をしていたり、生徒に対しても気軽に話しかけたりするため、生徒たちは話しかけやすいようだった。一方、B校は、以前は司書室がなかったのだが、設置されてからはカウンターにいる時間が減ってしまい、生徒との会話が少なくなってしまったと話していた。また、気軽に話しかけすぎると、C校の司書教諭は図書委員や学校図書館の常連などのよく関わる生徒とそうでない生徒で話しやすさに差が出てしまい、後者が疎外感を感じてしまう可能性を考え、他の生徒がいる前で気軽に話しかけることは控えていると話していた。

司書や司書教諭と話すことの魅力について、A校の司書教諭は「大人に話をしたい生徒が話しかけてくることがある」と述べていた。会話の内容としては、自分の興味関心のある学術的な内容で、「自分が知っている少しくラスメイトには難しいお話をしたいようだ」、とA校の司書教諭は述べる。たまたま遭遇するか、職員室を訪ねなければいけない教科教員とは違い、気軽に自分から会いに行ける大人として、学校図書館担当者が好まれているのではないかと考えられる。また、C校の図書委員生徒は「大人の意見を聞きたい悩みを話すときがある」と述べていた。大人の中でも特に、クラス担任や部活の顧問など距離感が近すぎる大人や、関わりのあるあまりない教員と違い、コミュニティに直接関わっていないが話しやすい大人であるという点で、学校図書館担当者が好まれているのではないかと考察する。

この項目で得られた知見を、箇条書きでまとめる。

- (1) 学校図書館は、既知の先生や先輩との社交の場になることがある
- (2) 学校図書館担当者は、親しみやすい大人として生徒に好まれ、生徒の知識のアウトプットや、悩み相談の相手となることがある

[項目3：会話がおもな活動]

この項目における質問は、

[質問 3-a] あなたの学校の学校図書館は、学校図書館内の会話についてのルールを設けていますか？

[質問 3-b] あなたの学校の学校図書館では、どのような会話がされていますか？

である。

この項目についての回答を表4、表5に示す。

表4 [項目3：会話が主な活動]についての回答—会話についてのルール

<p>A 校</p>	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 他人に迷惑をかけるほどの大声を出している場合は注意をする</li> <li>◎ テストの時期は自然と常識的な声の大きさになる</li> <li>◎ 静かに自習をする教室が他にあるので、学校図書館では勉強を教え合うなど多少の会話をする事ができる、他の生徒がするかもしれないということを前提に集まる生徒が多い</li> <li>◎ 公共図書館で不適切な行動をしないためにも、目に余るようなうるさいおしゃべりや、活発すぎる動作には注意をすることがある             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 図書館内での鬼ごっこ・かくれんぼなど</li> </ul> </li> </ul> <p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ テスト時期には自然と静かにする人が多くなるので、会話に関するルールを厳しくしてほしいなどとは感じたことはない</li> </ul>
<p>B 校</p>	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ ルールは特に設けていない</li> <li>◎ 学校図書館担当者が注意することもほとんどない</li> </ul> <p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 話している本人同士が聞こえるような声の大きさと話す             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どうしてそうするのか：図書館はしずかにするべき場所だと思っている/ルールを言い渡されたわけではないが自然にそうしている</li> </ul> </li> </ul>

<p>C 校</p>	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <p>◎ 周りに迷惑をかけない程度にして欲しいが、ルールとして明言した覚えはない</p> <p>◎ 目に余るようならその都度注意しているので、ルールとして生徒が認識したのではないか</p> <p><b>生徒</b></p> <p>◎ 大きい声は出さない</p> <p>◎ 1年生のとき、図書館の使い方の説明を受けた時に言われた気がする</p>
----------------	--

表5 [項目3：会話が主な活動]の項目についての回答—会話の内容

<p>A 校</p>	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 生徒が最近知った・勉強したこと</li> <li>◎ 悩み相談             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 軽い悩みから重大な心の悩みまで</li> </ul> </li> </ul> <p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 読んでいる本について</li> <li>◎ 雑談             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人間関係や恋愛の話題など学校生活に関するもの</li> </ul> </li> </ul>
<p>B 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 本の話</li> <li>◎ 宿題の愚痴</li> <li>◎ 最近やっているゲームの話</li> </ul>
<p>C 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ おすすめの本</li> <li>◎ 悩み相談</li> <li>◎ 雑談</li> </ul>

3校とも、学校図書館担当者側は特にルールを決めておらず、他者に迷惑をかけたり、危ない行為があったり注意するというスタンスをとっていた。生徒は、その注意を見て学校図書館における不適切な声の大きさがどの程度なのかを把握するようだ。[8]のもうひとつの我が家の項目でも述べるが、B校の生徒は、下級生に対して注意したこともあると述べていた。また、B校の生徒は、公共図書館が静かな雰囲気なので、同じように振舞うべきだと思っていると述べた。

会話の内容に関しては、3校とも、学校生活についてや、普段の遊びについての雑談が多かった。[1]の「中立の領域」で述べたように、普段あまり話せない生徒同士の社交場になっていることから、図書館や本に関する話題でないことも話したくなるのだと考えられる。特に、人間関係の話題などは、他のクラスや部活が違う生徒に話す方が気楽なのだろうと考えられる。



しかし、時にはいじめなど重い話題の悩み相談が行われることもあると A 校の司書教諭は述べた。このことに関連して、研究計画を立てている段階で、現職の司書教諭の知り合いから、学校司書だけでは、保健室登校児のような教室に行けなくなってしまった生徒を、授業時間中に図書館においておくことはできず、お話を聞いたりアドバイスをしたりすることも難しいと聞いた。学校司書は教員免許を持っていなくてもなることができ、教育心理学や教育相談などの資格がないためである。独学で教育関係の勉強をしている学校司書もいるそうだが、教員という立場ではないと生徒への対応が限られてしまうそう。この問題について、A 校の司書教諭・学校司書の方に質問したところ、学校司書は生徒を客観的に見た時の様子や、生徒からお話を聞いたことを司書教諭に伝えるようにしているとの回答を得た。教員としての指導でなく、その場にいた大人としての対応という捉え方をするようにしているそう。学校図書館だけでは解決できない場合は、クラス担任の先生に報告したり、保健室に行くようにアドバイスしたりすることもあるそう。司書教諭と学校司書の連携・情報共有が重要であり、さらには養護教諭・クラス担任・部活顧問・スクールカウンセラー・保護者等とも連携することが求められる場合もあるだろう。しかし、現状では、専任の司書教諭も学校司書もおらず、学校図書館に大人がいない時間帯がほとんどである学校の話をする。保健室やスクールカウンセラーに頼るほどではないが悩みを抱えている生徒の避難場所としての学校図書館、そして話し相手の大人としての専任の学校図書館担当者を児童・生徒に提供することで、いじめや家庭での問題の早期発見につながることもあるのではないかと考える。

この項目のまとめを箇条書きにする。

- (1) 学校図書館では、会話のルールを明示していない場合があるが、注意されている様子を見ることで生徒自身が自分の中で学校図書館での望ましい振舞いを考え、利用している
- (2) 学校図書館は、普段話せない人との社交場になることもあるので、図書館や本に関する話題以外の雑談も多い
- (3) 学校図書館担当者が、生徒の重い悩みを発見することもあり、学校図書館担当者同士や、その他の教員などとのネットワークが必要になることもある

#### [項目 4：利用しやすさと便宜]

この項目についての質問は以下の通りである。

[質問 4-a] あなたの学校図書館の、時間帯別の状況を教えてください。

※《始業前》《休み時間》《授業時間中(図書館を使うことが前提となっている授業は除く)》《昼休み》《放課後》のそれぞれについて、開館しているか、図書の貸出は可能か、学校図書館担当者はいるか、図書委員はいるかを聞く。

[質問 4-b] 前の質問であげた時間以外で、生徒の要望に合わせて開館時間を工夫している例はありますか？

[質問 4-c] あなたの学校の学校図書館は、生徒が立ち寄りやすい位置にありますか？  
また、立ち寄りやすいような工夫がされていますか。

この[質問 4-a]、[質問 4-b]の回答を表 6～表 8 に示す。また、開館時間に関するその他の意見を表 9 に示す。[質問 4-c]の回答を表 10 に示す。

表6 [項目4：利用しやすさと便宜]についての回答—開館時間とその状況—A校

	開館	貸出	担当者	図書委員	備考
始業前	○ 7:45~	○	○	○	◎ 親の送迎が早い生徒 ◎ 学校にいる間に読む本を借りて放課後返しに来る生徒
休み時間	○	○	○	×	
授業時間	○	○	○	×	
昼休み	○	○	○	○	◎ 給食前と給食後に生徒が来る
放課後	○ (平日~18:00) ○ (土曜~16:00) ○	○	○	○	◎ 部活がない人 ◎ 親の迎え・バス待ち ◎ 友達との待ち合わせ
その他					

表7 [項目4：利用しやすさと便宜]についての回答—開館時間とその状況—B校

	開館	貸出	担当者	図書委員	備考
始業前	×	×	×	×	
休み時間	○	○	○	×	
授業時間	○	○	○	×	
昼休み	○	○	○	○	
放課後	○ (~17:00)	○	○	○	◎ 常連が多い ◎ 曜日限定で来る子ども ◎ 塾までの時間つぶし ◎ 部休の日
その他	テスト期間中の時間延長(過去の取り組み)				

表8 [項目4：利用しやすさと便宜]についての回答—開館時間とその状況—C校

	開館	貸出	担当者	図書 委員	備考
始業前	週2日○ (月・金)	○	○	△	◎ 空いていることを知っている人が少ないので、人が少なくて居心地がいい ◎ 図書委員は来ることのできる人が来る ◎ 月・金は8:00～、他の日は8:30～
休み 時間	○	○	○	×	
授業時間	○	○	○	×	
昼休み	○	○	○	○	
放課後	○ (平日~17:00) (土曜~15:00)	○	○	○	◎ 土曜日は4時間授業(昼で終わり)
その他					

表9 [項目4：利用しやすさと便宜]についての回答—開館時間に関するその他の意見

<p>A 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 放課後遅くまで開けてほしい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 部活が終わった後に図書館によりたい</li> <li>・ 親が迎えに来るまでの間、外で待っているのは寒いので、図書館が開いていたらうれしい</li> </ul>
<p>B 校</p>	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <p>◎ テスト期間の開館時間延長(過去の取り組み)</p> <p><b>生徒</b></p> <p>◎ 放課後遅くまで開けてほしい</p>
<p>C 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 課外の後にも空いているとうれしい</p> <p>◎ 始業前は週2日しか開いていないが、もっと開けてほしい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 開いていることを知っている人が少ないので、利用者が少なく、居心地がよい</li> </ul>

表 10 [項目 4：利用しやすさと便宜]についての回答—図書館の場所に関する意見

<p>A 校</p>	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <p>◎ 中等部の職員室に近いので、先生との待ち合わせ場所として使われることもある</p> <p>◎ 高等部の教室から遠くなってしまうので、中学生の時はよく来ていた子も、高校生になってからはあまり来なくなってしまう。</p> <p><b>生徒</b></p> <p>◎ 高校生になってからもバス乗り場は図書館に近いので、朝や放課後は来やすいと思う</p> <p>◎ ピロティから直通で来ることができると便利だと思う。ピロティはどこに行くにも通るので。</p>
<p>B 校</p>	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <p>◎ 分かりにくい場所にあるので案内板を設置している</p> <p>◎ 常連になっている子は分かりにくかったり不便だったりするのが苦にならないのでここに来ているのではないか。不便さや分かりにくさよりも、ここに来たい気持ちが勝っているのかもしれない。</p> <p><b>生徒</b></p> <p>◎ 不便ではない</p>
<p>C 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 1年生の教室から近いので、満足している(1年生生徒)</p>



写真1 図書館の入口前の雑誌スペースと座席(A校)



写真2 学校図書館の入口での展示(B校)

どの学校も、休み時間、授業時間、昼休み、放課後は開館しており、貸出可能で、学校図書館担当者がいた。しかし、B校では毎日、C校では日によって、始業前の時間が開いていないことが分かった。一方A校は始業前の時間は毎日開いており、どのような生徒が多いか聞いたところ、「親の送迎が早い生徒」、「学校にいる間に読む本を借りて放課後返しに来る生徒」が多いようだ。A校は、私立校である点から必ずしも生徒が学校の近くに住んでいるとは限らず、駅からも遠いので、親の送迎での通学や、バス通学をする生徒が多い。そのため、朝の時間の暇つぶしとしてニーズがあるのだろう。一方、B校や、C校では駅から歩いてくる生徒が多いため、学校に着く時間を自分たちで調整できる。そのため、朝にあまりニーズがないのではないかと思われる。C校では、開館しているということを知っている生徒が少なく、空いているという点で朝の開館を増やしてほしいという声があがったが、B校では、他に開けてほしい時間がないかと聞いた時にも朝という答えは返ってこなかった。始業前の朝の時間へのニーズは学校によって異なり、それに合わせた運営を行うのがよいと考えられる。

また、どの学校でも放課後の開館への生徒のニーズは大きい。放課後は部活がある生徒は学校図書館に来られないこともあるので、部活の後に開けておいてほしいという声が上がった。また、前述したように親の送迎やバス通学の生徒が多いA校では、帰りの時間に親を待つ場所が欲しいとの声が上がった。今はバス乗り場の近くの外で待っていることが多いそうで、寒い・一人でいると不安だとの訴えがあった。中学生の年齢では、寄り道を禁止している学校・家庭も多いと考えられるので、学校内に落ち着いて過ごせる場所があるべきだと考える。この問題については、学校図書館の地域開放<sup>49)</sup>や、放課後子ども総合プラン<sup>50)</sup>とも関連して考えるべきである。

また、学校図書館の場所については、学校図書館が好きで通ってきている生徒が多いので、あまり否定的な意見は出なかった。特に、A校は職員室に近いところに学校図書館があるうえ、学校図書館の入口の外に雑誌スペース、新聞スペース、座席が設けられていることより、教員との待ち合わせとして使われることが多いようだ[写真1]。また、B校では学校図書館の入口付近に図書を展示し、利用者呼び込む工夫をしていた[写真2]。しかし、A校については、高等学校の教室・中学校の教室・図書館が横並びに並んでいるので、高校生になると足が遠のいてしまう生徒が多いことが欠点だと学校図書館担当者が述べていた。中高一貫校なので、高校生の方が進路などを考えなければならず勉強に力が入



る、という理由もあるだろうが、場所の不便さで足が遠のいてしまうという理由も少なからず関わっているのではないかと考えられる。また、生徒がよく集まるピロティから直通で来ることができるという意見もあった。公共図書館でも、複合施設化、人が集まる駅の近くに建てるなどの工夫がなされている。学校内でも、情報センター化の流れに乗ってコンピューター室との複合化を図る、玄関などの生徒の集まる場所の近くに配置するなどの工夫をすることで、より活気にあふれた学校図書館にすることができるのではないかと考えられる。

この項目で得られた知見は、以下のとおりである。

- (1) 多くの学校にとって休み時間・授業時間・昼休み・放課後に開館のニーズはあるが、始業前の朝の時間については、生徒の通学の方法などによってニーズがあるかどうかは様々である
- (2) 特に放課後の開館へのニーズは高く、課外活動の終了時間、バスや送迎の時間との兼ね合いで、延長が望まれている
- (3) 学校図書館の場所については、生徒が普段いる場所の近く(ホームルーム教室など)や、生徒がよく集まる場所の近くや、生徒の動線上にあることが望ましい

[項目 5：常連]

この、項目についての質問は以下の通りである。

[質問 5] あなたの学校の学校図書館には、定期的に訪れる生徒がいますか？図書委員会の仕事や、調べ学習の課題等で訪れざるを得なくて訪れている生徒は除きます。

この項目についての回答を[表 11]に示す。

表 11 [項目 4：常連]についての回答

A 校	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ あまり他の利用者のことは意識しないのでよくわからない</li> <li>◎ クラスメイトとかがいたら、いつものこの人いるなあと思うことがある</li> </ul>
B 校	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 周りの人のことは気にしないよくわからない</li> <li>◎ 一人で来ることが多い</li> </ul>
C 校	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 同じクラスの人同士とかなら少し気にする</li> <li>◎ 図書委員同士だったらしゃべることもある</li> <li>◎ 友達と来るからあまり他の人を気にすることはない</li> <li>◎ 学校図書館にくる生徒は大体固定されているように思う</li> </ul>

どの学校でも、他の利用者を気にしない生徒が多かった。[項目 1：中立の領域で]、[項目 3：会話がおもな活動]でも述べたが、既知の生徒同士で関わることが多いとあったが、ここでも既知の生徒同士しか気にしておらず、他の生徒のことは気になっていないことが分かる。特に、C校の生徒が言うように、自身が友達と一緒に訪れた場合、友達とのやり取りが中心となり、他の利用者に目は向かないだろう。この項目で分かったことを、以下のようにまとめる。

(1) 自分以外の利用者を意識している生徒は少なく、既知の生徒同士ではない常連同士の関わりは少ない

[項目 6：入りやすさ]

この項目の質問は以下の通りである。

[質問 6] あなたの学校図書館は児童・生徒が気軽に立ち寄りやすいと思うか。また、なぜそう思うか。どのような工夫をしているか。

この項目の回答を[表 12]に示す。

表 12 [項目 6：入りやすさ]についての回答

<p>A 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ すぐに学校図書館の雰囲気になじめた</li> <li>◎ 普段あまり出入りする事のない教室なので最初は緊張したが、中学一年生の時から図書委員になり、司書の先生と話すようになって緊張しなくなってきた</li> <li>◎ にぎやかなところが好きな人にとっては入りにくいかもしれないが、私は静かなところが好きなので</li> <li>◎ 本を延滞している人は気まずくて入りにくいかもしれない</li> <li>◎ 1年～6年(高等部1年生が4年生と呼ばれている)がいるから、上の学年の人に挟まれた席があったりするとそこは座りにくい</li> </ul>
<p>B 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 小学生の頃から学校図書館に通っているので、学校図書館に入ることに抵抗はない</li> <li>◎ 周りの目を気にしないタイプなので、どこかに入りにくいと思うことがない</li> <li>◎ 公共図書館と比べると <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どちらがよいとかはない。近い方に行く。</li> <li>・ 公共図書館は他の利用者に気をつけてしまうので学校図書館の方が好き</li> <li>・ 公共図書館のほう本が多くあるので好き</li> </ul> </li> </ul>
<p>C 校</p>	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 図書館の常連さんと他の生徒との格差を感じさせないようにしている</li> <li>◎ そっとしておいてほしい人もいると思うのでこちらからは話しかけないようにしている</li> </ul> <p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 司書の方が話しかけやすいので、気軽に來ることができる</li> </ul>

[項目6：入りやすさ]については、[項目2：サードプレイスは人を平等にするもの]で司書室が出来てその中にいることが多くなったため、生徒と話すことが少なくなってしまったB校以外は、「学校図書館担当者の親しみやすさ」を学校図書館の親しみやすさの理由として挙げている。それ以外の理由としては、「小学校の時から学校図書館に通っているので慣れている」、「人目を気にしないので」などが挙げられた。小学校の図書館に通っていたB校の生徒に公共図書館にも行くのか、と尋ねたところ、よく行くと答えた。図書館というものの自体への親しみも、学校図書館への親しみやすさに影響すると考えられる。また、学校図書館内に入りやすくするための工夫として、[項目4：利用しやすさと便宜]でも挙げた、学校図書館の入口前に雑誌スペース・新聞スペース・座席を設けること[写真1]、学校図書館の入口付近に図書をディスプレイすること[写真2]、を挙げる。

この項目で得られた知見を以下のようにまとめる。

- (1) 学校図書館の親しみやすさには、「学校図書館担当者の親しみやすさ」、「図書館という存在への親しみ」が影響する

[項目7：その雰囲気には遊び心がある]

この項目については、以下のように質問する。

[質問7] あなたの学校図書館では、児童・生徒は楽しそうにしているか。どのようなときに楽しそうにしているか。

この項目についての回答を表13に示す。

表13 [項目7：その雰囲気には遊び心がある]についての回答

A 校	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 単に先生が好きなので話していると楽しい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ どうでもいい話にもつきあってくれる</li> <li>・ 顔とか名前とか覚えてもらえると嬉しい</li> </ul> <p>◎ 読みたい本があるから楽しい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 特集展示で新しいことに興味が持てる</li> </ul> <p>◎ イベントがあったり、季節感のある展示・飾りつけがあったりする</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ (ちょうどこの時は大きなクリスマスツリーが飾られていた)</li> </ul>
B 校	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 本を読んでいるときに楽しい</p>
C 校	<p><b>図書館担当者</b></p> <p>◎ 読書会やビブリオバトルは、まずは図書委員におもしろさを知ってもらおうと思って企画している</p> <p><b>生徒</b></p> <p>◎ 本の種類が多くあるので楽しい</p> <p>◎ 図書委員だけで、読書会やビブリオバトルなどのイベントがあるが、それが楽しい</p>



写真3 学校図書館内に飾られたクリスマスツリー(A校)



写真4 クリスマスツリーについてのお知らせを表示しているデジタルサイネージ(A校)



写真5 ポスター抽選会の宣伝を表示しているデジタルサイネージ(A校)

学校図書館における楽しみの大部分は「本・読書」によるものであるようだ。また、イベントごとを楽しんでいる生徒も多い。A校で特徴的なのは、学校図書館の楽しみの一つとして、学校図書館担当者との会話を挙げていることだ。[項目3：会話がおもな活動]ともつながるが、学校図書館担当者の人柄や、生徒とのかかわり方、在室時間の多さによって、学校図書館の楽しさが変わってくることもあるだろう。また、学校図書館は学校内では少ない「人を集める」ことを目的のひとつに持つ部屋である。学校図書館担当者や図書委員が、イベントを催したり、季節の飾りつけをしたり、図書だよりを発行したりして学校図書館に人が来るように努力をしている。そのようなイベント・飾りつけ・会報も図書館の遊び心と言えるのではないか。A校ではこの時期、図書館内にクリスマスツリーが飾られており[写真3]、図書館の入口にあるデジタルサイネージ[写真4]でも校内一大きなクリスマスツリーがあると広報していた。また、A校では、図書館内に飾っていたポスターを抽選で生徒にプレゼントするイベントも行っているそうだ[写真5]。また、七夕の時期には笹を飾り、生徒が自由に短冊を書いてつるせるようにしたところ、常連以外の生徒も



来て楽しんでいただけたようだ。このような学校図書館の遊び心は、「第三の場」として非常に有用なのではないかと考える。

この項目についての知見を以下のようにまとめる。

- (1) 学校図書館の常連にとっての楽しみは本・読書によるものである
- (2) 学校図書館は、学校図書館担当者・児童・生徒が企画するイベント・飾りつけ・図書館報などに遊び心を感じられ、それによって常連以外の生徒が来ることもある

#### [項目 8：もうひとつの我が家]

この項目の質問は以下の通りである。

- [質問 8-a] あなたの学校図書館は、児童・生徒に「自分たちの居場所」と思われている、と思いますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。
- [質問 8-b] あなたの学校図書館は、児童・生徒にとって元気を取り戻せる場所だと思いますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。
- [質問 8-c] あなたの学校図書館は、児童・生徒が思い思いのことをして過ごせていますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。
- [質問 8-d] あなたの学校図書館では、利用者同士がルールを守り、お互いを気遣って行動できていますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。

[質問 8-a]と[質問 8-b]は関連する回答が多かったので[表 14]にまとめ、[質問 8-c]は[表 15]、[質問 8-d]は[表 16]にまとめた。

表 14 [項目 8：もうひとつの我が家]についての回答

—自分たちの場所・元気をとりもどせる場所

<p>A 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 本が好きなので、本に囲まれていると落ち着く</li> <li>◎ 教室だとうるさい人が多いので、図書館に来る</li> <li>◎ (図書館が中庭に面している・体育館への通り道なことからのぎやかな度合いはあまり変わらない時もあるが)うるさくても図書館にいるときは何故かそんなに気にならない</li> <li>◎ 一人でいたいときに来る。「本を読んでいる」という周りから見て何をしているか一目でわかるようなことをしているとき、人はあまり話しかけてこないと思うから</li> <li>◎ 似たようなところとしては、音楽室(音楽系の部活に入っている子)や部室</li> </ul>
<p>B 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 落ち込んだ時は音楽を聴きたいので、学校にいる間はできない。放課後まで待つ</li> <li>◎ 落ち込んでいるときは教室で寝る。休み時間はみんな外に遊びに行くので、教室に残っていれば自然と一人になれる</li> </ul>
<p>C 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 落ち込んだ時に悩み相談をしに来る</li> <li>◎ 落ち込むと自分が好きな本を読むという行為をしたくなるので来る</li> <li>◎ 保健室と似たような雰囲気を感じる</li> </ul>

表 15 [項目 8：もうひとつの我が家]についての回答—自由

<p>A 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 先輩に気を遣う時はある</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 使いたい本棚の前に先輩がいると、どくまで待っていることがある</li> </ul> <p>◎ 飲み物を飲むことを許可してほしい</p> <p>◎ 予約したまま取りに来なくて誰も借りられない本があるのをなんとかしてほしい</p>
<p>B 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 不自由だと感じることはない</p> <p>◎ 自分の趣味や部活に関連する雑誌があるので、それを読んでいるときは楽しいな、と感じる(読書とはまた違った楽しみ)</p> <p>◎ 強いて言えば、漫画を置くなどすると他の生徒もよく訪れるようになるのではないか</p>
<p>C 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 特に不自由感じない</p>

表 16 [項目 8：もうひとつの我が家]についての回答—思いやり

<p>A 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 場所としての使い方でルール違反だな、と感じることはない</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 貸し出した本の延滞や、無断持ち出しなどのルール違反はある</li> </ul>
<p>B 校</p>	<p><b>生徒</b></p> <p>◎ 大声でしゃべる人はいる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ (どういった対応をしたか)先輩だと声をかけにくい、後輩や同学年だと注意したこともあった</li> </ul> <p>◎ 席の下でスマートフォンをいじっている人がいた(校内で携帯電話の使用が認められていない)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ (どういった対応をしたか)見過ごした。でも、ダサいなあと思った。反面教師にしよう、と感じた</li> </ul>
<p>C 校</p>	<p><b>学校図書館担当者</b></p> <p>◎ たまにうるさい子に注意することはある</p> <p><b>生徒</b></p> <p>◎ ルールを守り合って利用できていると思う</p>



写真6 雑誌コーナー近くのソファ(C校)



写真7 書架の隙間に配置された椅子(C校)

自分たちの場所・元気を取り戻せる場所についての回答は、「本が好きだから」本がある場所を居場所と感じ、元気を取り戻せるという回答が多くみられた。他には、「ひとりになりたいときに来る」、「しずかなところが好きなので来る」、「悩み相談をしに来る」という回答があった。学校図書館は、「本が好き生徒」、「ひとりでいることや、静かな場所が好き生徒」にとっては、元気を取り戻せる心の居場所となれるのではないか。「悩み相談をしに来る」と言った生徒がいたことは、[項目2：サードプレイスは人を平等にするもの]で学校図書館担当者との関わりが生徒の悩みを発見することもあると述べたことと合わせて、学校図書館が保健室・スクールカウンセラー室のような役割を果たせることを示唆している。

また、自由に過ごせる場所かどうかという質問には、否定的な意見はあまり見られなかった。A校の生徒が「先輩に気を遣う時はある」と述べたが、マナーとして常識の範囲内だと感じた。自由とを感じる場面については、B校の生徒が、朝読書や読書感想文などから連想される「読書」とは違った形で本の読み方をしているときに挙げた。似たような例だと、「占いの本を見て楽しむ」、「画集を眺める」、「インターネットで動画を見て映像表現を楽しむ」などが挙げられるだろう。前段での結果は「学校図書館は読書好きの生徒にとっての場所」というイメージを持たせてしまうかもしれないが、このような少し違った楽しみ方を提示することで、スポーツ好きな子が記録を伸ばす方法を調べたり、絵が好きな子が画集を眺めに来たりと従来とは違う層の利用者を見込めるのではないか。この話の延長として、B校には漫画資料がないが、漫画資料を置いてほしいという意見があがった。また、C校では様々な趣の座席が用意されているのが印象的であった。雑誌コーナー近くのソファでは男子生徒が数人で、体を寄せ合いながら雑誌や本を読んでいた[写真6]。会話も多くみられ、友達同士で連れ立って学校図書館を訪れた様子だった。一方、書架の隙間に配置された椅子では、女子生徒が一人で静かに読書をしていた[写真7]。C校のように、様々なタイプの生徒が居心地よいと思うことができるように、様々な趣の座席を用意すること、それぞれが住み分けできるように工夫すること、が大切であると感じた。

利用者同士が思いやりを持って行動できているかについては、B校の生徒が、後輩にはたまに注意することもあると述べたのが印象的であった。前述のとおり、B校は司書室が出来てから学校図書館担当者がフロアに出ることが少なくなってしまったので、生徒の自

治が進んだのではないかと考える。これは、この発言をした生徒自身が、「学校図書館ではお互いにルールを守って行動すべきである」と感じていることの表れではないか。また、そのような注意をしようと思える雰囲気にあることも伺える。「第三の場」には「遊び心」、「会話」、「自由」が必要であるが、そのような特徴を持った場所だからこそ、生徒の自主的な規範意識を育てることにつながるのではないかと考える。規則でがんじがらめに縛られ、やっていいことも限られているところでは、お互いに思いやりを持っていなくてもその場が混乱することはない。[項目3：会話がおもな活動]でA校の学校図書館が述べたように、公共図書館など、学校図書館以外の自由な場所の中での振舞い方を学ぶという点でも、学校内に「第三の場」があることは生徒にとって望ましいのではないかと考える。

この項目で得られた知見を以下のようにまとめる。

- (1) 学校図書館は、本・読書が好きな生徒にとっては、自分の好きなものがある・自分の好きなことができる場所として、心を安らげ、元気を取り戻すことのできる居場所となり得る
- (2) 学校図書館担当者は、生徒の相談相手として、養護教諭やスクールカウンセラーと似た役割を果たすことができ、学校図書館担当者がいる学校図書館が元気を取り戻すことのできる居場所と感じられることもある
- (3) 学校図書館は、部活関連の雑誌を読む、画集を眺める、インターネットで動画を見るなど、多種多様な楽しみ方を提示することによって、本・読書が好きな生徒以外にとっての居場所にもなることができる
- (4) 学校図書館は、おのおのが自由に好きなことを楽しめる環境だからこそ、お互いの思いやりが大切であり、自由な場所での振舞い方を学ぶ場所になり得る

### 5.3. 調査結果のまとめと考察

ここでは、各項目で得られた知見を一つの表にまとめ、各項目が現状の学校図書館において達成されているか、達成されていないのであればどのような達成のための方策が考えられるかを表17にまとめる。達成できているかの項目では、達成できていると思った点は○、達成できていない・改善の余地があると考えられるものは△で評価している。

表 17 調査結果のまとめ

項目 番号	評価項目	明らかになった点	評価項目の達成状況
1	① 関係性の拘束性がないこと ② 所属・脱退の概念がないこと ③ 多様な人との交流ができること	(1) 学校図書館は、普段はあまり話すことができない既知の生徒同士の社交場となることがある (2) 図書委員会という組織がミキサーとなって、新しい人間関係を築くことがある	① → ○ ② → ○ ③ → △ 既知の生徒同士の社交場ではあるが、新しい人間関係は作れていない。
2	① 必要以上の上下関係がないこと ② 上下関係を越えた交流があること	(1) 学校図書館は、既知の先生や先輩との社交の場になることがある (2) 学校図書館担当者は、親しみやすい大人として生徒に好まれ、生徒の知識のアウトプットや、悩み相談の相手となることがある	① → ○ 生徒と学校図書館担当者ではフランクなやり取りが行われることがあり、場としての雰囲気は厳しい上下関係を持たないと考える。 ② → △ 既知の先輩と後輩、生徒と教師ではあるが、新しくできる上下関係は少ない。しかし、学校図書館担当者と生徒の関係は学校図書館で形成されたものと言える。



3	<p>① 会話にマナーや節度があること</p> <p>② 楽しい会話が行われていること</p>	<p>(1) 学校図書館では、会話のルールを明示していない場合があるが、注意されている様子を見ることで生徒自身が自分の中で学校図書館での望ましい振舞いを考え、利用している</p> <p>(2) 学校図書館は、普段話せない人との社交場になることもあるので、図書館や本に関する話題以外の雑談も多い</p> <p>(3) 学校図書館担当者が、生徒の重い悩みを発見することもあり、学校図書館担当者同士や、その他の教員などとのネットワークが必要になることもある</p>	<p>① → ○</p> <p>周りのことを考えた節度ある会話がなされており、普段話せない人との会話を生徒が楽しんでいることが伺える。</p> <p>② → ○</p> <p>普段話せない人との話は雑談などの楽しい内容であると語られた。</p>
---	---	---	--

4	<p>① 生徒の行きたい時間に開いていること</p> <p>② 生徒にとって立ち寄りやすい立地にあること</p>	<p>(1) 多くの学校にとって休み時間・授業時間・昼休み・放課後に開館のニーズはあるが、始業前の朝の時間については、生徒の通学の方法などによってニーズがあるかどうかは様々である</p> <p>(2) 特に放課後の開館へのニーズは高く、課外活動の終了時間、バスや送迎の時間との兼ね合いで、延長が望まれている</p> <p>(3) 学校図書館の場所については、生徒が普段いる場所の近く(ホームルーム教室など)や、生徒がよく集まる場所の近くや、生徒の動線上にあることが望ましい</p>	<p>① → △ 放課後の生徒の居場所としての開館時間延長が望まれている。</p> <p>② → ○ 学校図書館に通う常連たちにとっては苦にならない程度には立ち寄りやすい立地にあるようだ。</p>
---	--	--	--

5	<p>① 常連がいること</p> <p>② 常連によって雰囲気形成がされていること</p> <p>③ 常連同士が結束し合っって新参者が介入しにくい空気を作っていないこと</p>	<p>(1) 自分以外の利用者を意識している生徒は少なく、既知の生徒同士ではない常連同士の関わりは少ない</p>	<p>① → ○ どの学校も常連はある程度いた。</p> <p>② → △ 常連同士での雰囲気形成がなされていない。</p> <p>③ → ? 常連同士での雰囲気形成がなされていないのでわからない。</p>
6	<p>① 生徒にとって立ち寄りやすい雰囲気であること</p>	<p>(1) 学校図書館の親しみやすさには、「学校図書館担当者の親しみやすさ」、「図書館という存在への親しみ」が影響する</p>	<p>① → ○ 常連生徒にとっては、入りやすいと感じている生徒が多かった。</p>

7	①楽しい雰囲気を持っている	<p>(1) 学校図書館の常連にとっての楽しみは本・読書によるものである</p> <p>(2) 学校図書館は、学校図書館担当者・児童・生徒が企画するイベント・飾りつけ・図書館報などに遊び心を感じられ、それによって常連以外の生徒が来ることもある</p>	<p>① → ○</p> <p>学校図書館には読書・本という娯楽がすでに備わっており、読書や本が好きな生徒にとっては楽しく魅力的な場所である。また、学校図書館の、イベント・飾りつけ・図書館報などが、楽しい場所を演出している</p>
---	---------------	---	---

8	<p>① 児童・生徒にとって自分たちの居場所という感覚がある</p> <p>② 児童・生徒が元気を取り戻せる場所である</p> <p>③ 児童・生徒が思い思いのことをして過ごせる</p> <p>④ 利用者同士がルールを守ることができている</p>	<p>(1) 学校図書館は、本・読書が好きな生徒にとっては、自分の好きなものがある・自分の好きなことができる場所として、心を安らげ、元気を取り戻すことのできる居場所となり得る</p> <p>(2) 学校図書館担当者は、生徒の相談相手として、養護教諭やスクールカウンセラーと似た役割を果たすことができ、学校図書館担当者がいる学校図書館が元気を取り戻すことのできる居場所と感じられることもある</p> <p>(3) 学校図書館は、部活関連の雑誌を読む、画集を眺める、インターネットで動画を見るなど、多種多様な楽しみ方を提示することによって、本・読書が好きな生徒以外にとっての居場所にもなることができる</p> <p>(4) 学校図書館は、おのおのが自由に好きなことを楽しめる環境だからこそ、お互いの思いやりが大切であり、自由な場所での振舞い方を学ぶ場所になり得る</p>	<p>①② → ○</p> <p>学校図書館は、本・読書が好きな生徒にとっては、自分の好きなものがあるという理由で、安心できる・元気の出る場所となっている。また、悩みを聞く相手もいるので、元気が出る。</p> <p>③ → ○</p> <p>自由に様々なことができるので、本・読書が好きな生徒以外にも安らげる場所となり得る</p> <p>④ → ○</p> <p>学校図書館では、自由に様々なことができる分、思いやりが必要だが、どの学校でも目立った問題はなく、問題が起こっても生徒自身が解決できていた</p>
---	---	---	--

学校図書館が「第三の場」として成り立つかどうかを3校での聞き取り調査の結果から以下で考察する。

[項目1：中立の領域で]、[項目2：サードプレイスは人を平等にするもの]、[項目5：常連]から、学校図書館は、普段は話さないが知り合い同士が交流する場となっていることが分かった。例えば、クラスが離れてしまった友達や、前年度以前の担任の先生や、教科担任の先生である。また、学校図書館担当者も、クラスの友達と比べれば、普段話さないといっていいただろう。この結果からみると、普段話さない人たちと話すことで、会話のルールを学ぶ場として学校図書館はふさわしいと言える。また、[項目3：会話がおもな活動]や、[項目8：もうひとつの我が家]の結果からも分かるように、会話に関して、学校図書館担当者からの指摘や、生徒自身の心がけ、生徒同士の指摘で、心地よい会話が行われるよう一定のルールが守られていることが分かった。

一方、[項目1：中立の領域で]、[項目2：サードプレイスは人を平等にするもの]、[項目5：常連]からは、新しい関係が築かれることが少ない点分かった。しかし、これについては、A校の学校図書館担当者が話した、図書委員の先輩と後輩の関係を通して、図書委員に入っていない後輩の友達と図書委員の先輩が図書館で話していることがあったという発言もあり、学校図書館が新しい交友関係を築く場所になることは実現不可能ではないだろう。さらに、学校図書館の利用者全員が興味を持ち、参加できるようなイベントを催せば、イベント内での交流も促進できるだろう。また、学校図書館担当者・図書委員・教員に関しては、利用者が気軽に話しかけてもいいということが分かるような名札を付けたり、看板などを立てたりなどして、利用者がおすすめの本の紹介・勉強のアドバイスなどを頼みやすくするような工夫をするのもよいと考える。

また、[項目3：会話がおもな活動]からは、生徒が悩みを学校図書館担当者に打ち明ける事例や、くだらない話も聞いてもらえる、名前を憶えてもらえて嬉しいと感じる事例から、学校図書館が社会的居場所としての心の居場所として機能しているのではないかと考えられる。また、[項目8：もうひとつの我が家]では、自分の好きなことをできる場という点で、本・読書が好きな生徒にとっての図書館が心の居場所となっていることが分かる。

[項目4：利用しやすさと便宜]からは、学校図書館が開館を望まれているのは、主に、「昼休み」、「放課後」であるが、「放課後」については課外活動や通学バス・親の送迎の

待ち時間として、より長い開館時間が望まれていることが分かった。これについては、放課後子ども総合プラン<sup>51)</sup>などを根拠に、ボランティアスタッフを活用した開館時間の延長や、学校図書館の地域開放を視野に入れるべきだと考える。また、「始業前」の開館については、出来ている学校と出来ていない学校があった。「始業前」の時間は、生徒の通学の方法により、ニーズの大きさが変わることが伺える。もし、勤務時間を前倒しして「始業前」の開館をすすめると、よりニーズの高い「放課後」の開館時間が短くなってしまうことが考えられるので、各学校の生徒からのニーズと、学校図書館担当者の体制をふまえ、開館すべきか決めるべきだと考える。

[項目6：入りやすさ]、[項目7：その雰囲気には遊び心がある]の項目では、学校図書館担当者の人柄・飾りつけや展示などによって、学校図書館が生徒にとって親しみやすい場所となっていることがうかがえる。

また、今回の調査で明らかにできなかった点として、学校図書館に来ていない生徒にとって、学校図書館に行かない理由は何なのか、学校図書館に行こうと思ってもらうにはどうすればよいのか、学校図書館以外に「第三の場」となる場所があるのか、がある。学校図書館を訪れない生徒にも、調査を行う必要がある。より多くの生徒に、「第三の場」を持ってもらうには、図書館だけではカバーできないこともあるだろう。談話室を作る、音楽室を解放するなど、学校全体で多様な「第三の場」を作っていくことが必要だと考える。

#### 5.4. 第5章のまとめ

第5章では、学校図書館担当者・学校図書館の常連生徒への聞き取り調査から、学校図書館の「第三の場」としての現状を考察した。

学校図書館は以下の点で、「第三の場」になることに適していると思われる。

- (1) 学校図書館は既知の生徒同士・生徒と教職員の交流の場となっており、多様な人と話すことができる
- (2) 学校図書館担当者からの指摘や、生徒同士の心がけによって、会話のマナーが守られている
- (3) 学校図書館担当者が悩み相談の相手としての役割を持っていること、「本・読書」好きな生徒にとっては好きなものに囲まれ好きなことができることで、学校図書館が元気を取り戻せる場所として認識されている
- (4) 学校図書館担当者の人柄や、飾りつけや展示、静かな雰囲気などによって、学校図書館の常連生徒から居心地のよい・楽しい場所と認識されている

一方現状の学校図書館の「第三の場」としての現状としての問題点としては以下の点が挙げられる。

- (1) 学校図書館は既知の生徒同士・生徒と教職員の交流の場となっているが、新しい人間関係は生まれにくい
- (2) 放課後の生徒の居場所として、より遅くまでの開館が求められている

しかし、これらの点は、利用者全体を巻き込んだイベントの実施、ボランティアの活用による開館時間の延長などで解決できる。

したがって、学校図書館が「第三の場」の特徴を満たすことは可能であると考えられる。



《脚注》

49) 前述 32) 33)

50) 前述 34)

51) 文部科学省, 厚生労働省. "放課後子ども総合プランについて: 学校・家庭・地域をつなぐ". School home community: 学校・家庭・地域をつなぐ. ○-○-○. <http://manabi-mirai.mext.go.jp/houkago/propulsion.html>, (2017-1-9).

## 6. 結論

本章では、本研究における調査から明らかになったすべての結果をまとめ、「第三の場」としての学校図書館の実現可能性、今後の展望について考察を行う。

### 6.1. 本研究のまとめ

本研究の目的は、「第三の場」としての学校図書館の現状と課題を明らかにし、学校図書館の場としての役割とそのための方策を考察することである。この目的のために、文献調査で、「場」としての学校図書館の議論を概観し(第二章)、学校図書館と「第三の場」の関わりを考察し(第三章)、「第三の場」の特徴の学校図書館への適応を試みた(第四章)。

また、第五章では、学校図書館担当者と学校図書館の常連生徒に聞き取り調査を行い、「第三の場」としての学校図書館の現状を調査した。また、その結果から、学校図書館に「第三の場」の理論を適用することが可能か検討し、今後の課題を考察した。

#### 6.1.1. 学校図書館の「場」としての議論(第2章より)

学校図書館の「場」としての議論については、主に「第三の場」、「ひろば」論がある。「第三の場」も「ひろば」論も、「人間関係」に着目した概念である。人間関係という観点は、従来の図書館のイメージからは想像しにくいものであり、この2つの概念について研究がなされたことで、学校図書館に新たな機能が見いだされたといえる。この二つはともに「他者との関係を重視する」という特徴を持つ概念だが、学習面に着目している「ひろば」論に比べて、「第三の場」より広い概念である。

先行研究の問題点として、久野の論文では、生徒同士の人間関係に着目しており、生徒と教師の関係にはあまり目が向けられていない。また、生徒同士の関係も、「図書企」という団体の構成員同士に限定されており、「図書企」生徒と一般の利用者との関係や一般の利用者同士の関係には言及されていない。

### 6.1.2. 学校図書館と「第三の場」の関わり(第3章より)

(1)児童・生徒の居場所として公共図書館が考えられること、(2)学校内にも「第三の場」のような「場」が求められていたこと、(3)特に学校図書館は(2)で述べた機能の要請が文部科学省によって明確に宣言されていることが分かった。児童・生徒が自分の力で「第三の場」を見つけることを期待するだけでなく学校が「第三の場」を提供できるように努力する必要があると考えた。生徒が学校にいる間も、放課後一度家に帰らずとも訪れることができ、家庭の事情や自宅の立地、金銭的問題などの格差が生じにくいという点で、学校内に備わっている施設に「第三の場」としての機能を持たせればよいと考えた。よって学校図書館が「第三の場」の機能を持つべきだと考える。

### 6.1.3. 学校図書館における「第三の場」の評価項目と質問内容(第4章より)

学校図書館が「第三の場」かどうかを測る評価指標・質問項目として、以下を設定した。

表 18 学校図書館における「第三の場」としての評価項目と質問項目(再掲 表 1)

項目 番号	評価項目	質問項目
1	① 関係性の拘束性がないこと ② 所属・脱退の概念がないこと ③ 多様な人との交流ができること	[質問 1] 仲良しグループのようなまとまり 同士でなく、別々に訪れた利用者同士が 関わることはありますか？エピソードが あったら教えてください。
2	① 必要以上の上下関係がないこと ② 上下関係を越えた交流があるこ と	[質問 2] 学年を超えた交流や、児童生徒と 教員・職員の交流が起こることはありま すか？エピソードがあったら教えてください。
3	① 会話にマナーや節度があること ② 楽しい会話が行われていること	[質問 3-a] あなたの学校の学校図書館は、 学校図書館内の会話についてのルールを 設けていますか？ [質問 3-b] あなたの学校の学校図書館で は、どのような会話がされていますか？

4	<p>① 生徒の行きたい時間に開いていること</p> <p>② 生徒にとって立ち寄りやすい立地にあること</p>	<p>[質問 4-a] あなたの学校図書館の、時間帯別の状況を教えてください。</p> <p>※《始業前》《休み時間》《授業時間中(図書館を使うことが前提となっている授業は除く)》《昼休み》《放課後》のそれぞれについて、開館しているか、図書の貸出は可能か、学校図書館担当者はいるか、図書委員はいるかを聞く。</p> <p>[質問 4-b] 前の質問であげた時間以外で、生徒の要望に合わせて開館時間を工夫している例はありますか？</p> <p>[質問 4-c] あなたの学校の学校図書館は、生徒が立ち寄りやすい位置にありますか？また、立ち寄りやすいような工夫がされていますか。</p>
5	<p>① 常連がいること</p> <p>② 常連によって雰囲気形成がされていること</p> <p>③ 常連同士が結束し合って新参加者が介入しにくい空気を作っていないこと</p>	<p>[質問 5] あなたの学校の学校図書館には、定期的に訪れる生徒がいますか？図書委員会の仕事や、調べ学習の課題等で訪れざるを得なくて訪れている生徒は除きます。</p>
6	<p>① 生徒にとって立ち寄りやすい雰囲気であること</p>	<p>[質問 6] あなたの学校図書館は児童・生徒が気軽に立ち寄りやすいと思うか。また、なぜそう思うか。どのような工夫をしているか。</p>

7	①楽しい雰囲気を持っている	[質問7] あなたの学校図書館では、児童・生徒は楽しそうにしているか。どのようなときに楽しそうにしているか。
8	① 児童・生徒にとって自分たちの居場所という感覚がある ② 児童・生徒が元気を取り戻せる場所である ③ 児童・生徒が思い思いのことをして過ごせる ④ 利用者同士がルールを守ることができている	[質問8-a] あなたの学校図書館は、児童・生徒に「自分たちの居場所」と思われている、と思いますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。 [質問8-b] あなたの学校図書館は、児童・生徒にとって元気を取り戻せる場所だと思いますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。 [質問8-c] あなたの学校図書館は、児童・生徒が思い思いのことをして過ごせていますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。 [質問8-d] あなたの学校図書館では、利用者同士がルールを守り、お互いを気遣って行動できていますか。エピソードなどがあれば聞かせてください。

#### 6.1.4. 「第三の場」としての学校図書館の実現可能性と展望(第5章)

第5章では、第4章で作成した評価項目と質問項目を用いて、学校図書館担当者・学校図書館の常連生徒に聞き取り調査を行い、「第三の場」としての学校図書館の現状を調査した。また、その結果から、学校図書館に「第三の場」の理論を適用することが可能か検討し、今後の課題を考察した。

その結果、学校図書館は「第三の場」として、いくつかの課題を抱えてはいるものの、「第三の場」になることは不可能ではないということが分かった。

現場の学校図書館担当者と学校図書館の常連生徒による発言により、以下の点で「第三の場」になることに適していることが明らかになった。

- (1) 学校図書館は既知の生徒同士・生徒と教職員の交流の場となっており、多様な人と話すことができること
- (2) 学校図書館担当者からの指摘や、生徒同士の心がけによって、会話のマナーが守られていること
- (3) 学校図書館担当者が悩み相談の相手としての役割を持っていること、「本・読書」が好きな生徒にとっては好きなものに囲まれ好きなことができることで、学校図書館が元気を取り戻せる場所として認識されていること
- (4) 学校図書館担当者の人柄や、飾りつけや展示、静かな雰囲気などによって、学校図書館は常連生徒から居心地のよい・楽しい場所と認識されていること

一方、現状の学校図書館の「第三の場」としての現状の問題点としては以下の点が明らかになった。

- (1) 学校図書館は既知の生徒同士・生徒と教職員の交流の場となっているが、新しい人間関係は生まれにくい
- (2) 放課後の生徒の居場所として、より遅くまでの開館が求められている

しかし、これらの点は、利用者全体を巻き込んだイベントの実施、ボランティアの活用による開館時間の延長などで解決できると思われる。そのため、学校図書館が「第三の場」の特徴を満たすことは可能であると考えられる。

## 6.2. 考察

本節では、本研究をふまえ、学校図書館が担うべき「場」としての役割を考察する。

### 6.2.1. 社交の場としての役割と「第三の場」

聞き取り調査では、学校図書館が既知の生徒同士・既知の生徒と教職員の社交の場となっていることが明らかになった。学校図書館が「第三の場」に適している理由として、学級・学年を超えて児童・生徒が集まる場であるという点を考えていたが、学級を超えた付き合いは出来ているようだ。今後は、上級生が下級生の質問に答える進路相談会を行う、自由参加ができる読書会を行うなど、学校図書館の利用者が学年を超えて交流できるようなイベントを開催するなどの工夫をしていくとよいと考える。また、せっかく「本」というコンテンツがある場なので、特定のジャンルの本が好きな人を集めてイベントを行うなど児童・生徒が楽しみながら、同じ趣味を持つ交友関係の輪を広めていくことを促進できればよいと考える。また、教師との関係性についても、教科の先生との座談会を開催したり、先生の学生時代のお話をするイベントを開催したりするなどして、普段からも話しかけやすいように、関係の形成を図るなどするとよいと考える。教科の先生との相性が悪く特定の教科が苦手になってしまう話をよく聞くので、教科の先生を何人かずつ知っておいて質問に行ける環境があれば、学業面にも影響を与えられるのではないかと考える。普段の問題解決に使える人脈を作れるようになればと思う。

また、児童・生徒がにぎやかに過ごせるスペースと、ひとりで静かに本を読むスペースを、座席のタイプにより住み分けていた事例や、ひとりで勉強をするための部屋を別に設けている事例が見られた。文部科学省の「これからの学校図書館の活用の在り方等について」<sup>52)</sup>で、「自由な読書のため、静かに読みふけるためのゆったりとした閲覧スペースを設けたり、談話室を別に設けたりする」ことが推奨されているように、閲覧スペースの工夫や、他の学校内の施設との住み分けも意識して、児童・生徒が楽しく会話しつつ、静かに過ごしたい生徒にとっても迷惑がかからないような工夫をする必要があると言える。

また、学校図書館担当者が生徒の悩み相談の相手、生徒の知識のアウトプット先として、生徒に親しまれていることが分かった。これは、児童・生徒にとっては、職員室よりは入りやすい空間にいる大人という点で、その存在が重宝されているのではないかと考える。これについて、他の教職員と比べて、学校図書館担当者が児童・生徒にどのような印象を与えているのかも明らかにされるとよいと考える。



### 6.2.2. 心の居場所と「第三の場」

実際に学校図書館をよく訪れる常連生徒に質問したところ、学校図書館担当者との会話を心のよりどころにしていると見受けられる発言が多くみられた。悩みを相談するというはっきりしたものだけではなく、どんな話も聞いてくれる、名前を憶えてくれるという些細なところで喜びを感じている生徒がいた。また、たとえ周りの雑音の音量が変わらないとしても図書館にいと落ち着くと言っていた生徒もいたのように、その場所にいること自体で安心感を得ることもあるということが分かった。この心理については、同じ場所を好き・同じ本というものが好きな人が周りにいるという安心感なのか、雑音の原因が同じ空間にいない、つまり干渉されることがないという安心感なのか、理由はよくわからないようであった。好きな場所があると、そこにいるだけで安心した気持ちや楽しい気持ちになれるようで、落ち込んだ時には非常に助けになるのではないかと筆者も、気の合うクラスメイトがいなかった中学生時代には、休み時間の度に図書館に行ったものだ。現在、クラス内でのいじめに加えて、部活内でのいじめ<sup>53)</sup>も報告されている。クラスでの人間関係に悩んでも、部活での人間関係があるから大丈夫ではないかと安心してはいられない。いじめの根本的解決に取り組むことはもちろんだが、往々にしていじめは水面下で動くものなので、生徒の心が休まる場所を作ったり、悩みを少しでも話せる環境を作ったりすることが大切だ。多くの生徒にとって、学校内に安心できる場所・安心できる仲間・安心できる行為ができるよう、学校側がなんらかの工夫をする必要があると考える。今回の学校図書館と「第三の場」に関する調査をもとに、学校図書館をよりよい「第三の場」として進歩させてゆき、それをもとに他の「第三の場」を創出することでできればと考える。

### 6.2.3. 放課後の児童生徒の居場所として

[項目4：利用しやすさと便宜]の、開館時間についての議論では、放課後のこどもたちの居場所が望まれていることが分かった。部活動に所属している生徒、バス通学や親の送迎での通学をしている生徒により、放課後の開館時間の延長が望まれている。「文部科学省事業評価書－平成21年度新規・拡充等－16.学校図書館の活性化推進総合事業（新規<sup>54)</sup>」でも、学校図書館の開放や、異校種の児童生徒や地域住民にも開放することによる学年、世代を超えた交流が行われれば、先ほど学校図書館が「第三の場」となるための課題

であった、[項目2：サードプレイスは人を平等にするもの]の中の上下関係のない交流が期待できる。また、地域に開放することで、学校図書館が学校の中でも学校に帰属している施設というイメージが薄れ、よりニュートラルな施設としてとらえることが可能になると考える。

## おわりに

本稿では、学校図書館が「第三の場」となることができるかどうか、その可能性を考察し、今後の展望を述べた。その結果、学校図書館は「第三の場」になる可能性を持ち、そのための方策についても実現可能な範囲で予測することができた。今後は、本稿で述べた学校図書館が「第三の場」であるかどうかを測るための質問項目と、現状の取り組みの例、改善の方策をもとに、「第三の場」を意識した学校図書館が増えてほしいと考える。また、「第三の場」を意識した学校図書館が、学校図書館における「第三の場」の効能についての調査を行い、児童・生徒へ及ぼす効果が明らかになれば、と考える。

また、今回は学校図書館のみについて、「第三の場」となる可能性を考察したが、学校内で言えば校庭や体育館、学校外で言えば児童館や塾についても同様の調査がなされ、「第三の場」として意識され、児童・生徒にとっての「第三の場」が多様に存在する社会になっていけば、と考える。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、ご多忙の中、聞き取り調査にご協力くださいました学校の学校図書館担当者・常連生徒の皆様には厚く御礼申し上げます。また、親身にアドバイスをくださった研究室の先輩、後輩の皆様、本当にありがとうございます。最後に、丁寧な指導をしてくださった平久江祐司先生に、心より感謝いたします。ありがとうございました。

《脚注》

52) 前掲 4)

53) 毎日新聞. "被害の女子生徒、損害求め地裁に提訴 奥出雲 / 島根". 毎日新聞. 2016-12-20. <http://mainichi.jp/articles/20161220/ddl/k32/040/420000c>, (2017-1-12).

54) 文部科学省. "文部科学省事業評価書－平成 21 年度新規・拡充等－16. 学校図書館の活性化推進総合事業（新規）". 文部科学省. 2008-8. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/hyouka/kekka/08100105/004/016.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100105/004/016.htm), (2017-1-9).

## 《参考文献一覧》

- 1) CHIKA IGAYA. "鎌倉市図書館のツイート「学校がつらい子は図書館へ」一時は削除も検討". THE HUFFINGTON POST. 2015-8-27.  
[HTTP://WWW.HUFFINGTONPOST.JP/2015/08/26/KAMAKURASHI-LIBRARY\\_N\\_8046562.HTML](http://www.huffingtonpost.jp/2015/08/26/kamakurashi-library_n_8046562.html), (2017-1-12).
- 2) FREDERICK WILFRED LANCASTER. LIBRARIES AND LIBRARIANS IN AN AGE OF ELECTRONICS. INFO RESOURCES PR, 1982, 229P.
- 3) 石本雄真. 心の居場所に関する理論的考察. 日本青年心理学会大会発表論文集. 2005, VOL.13, P.66-67.
- 4) 植松貞夫. デジタル時代の図書館建築とその施設・設備: デジタル情報時代の図書館建築: その可能性と課題. 情報の科学と技術. 2013, VOL.63, NO.6, P.216-220.
- 5) 学校不適応対策調査研究協力者会議. "登校拒否(不登校)問題について一児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して一". 文部科学省. 1992-3-13.  
[HTTP://WWW.MEXT.GO.JP/B\\_MENU/SHINGI/CHUKYO/CHUKYO3/SIRYO/06042105/001/001.HTM](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/001/001.htm), (2017-1-12).
- 6) 鎌倉市図書館. "鎌倉市図書館のツイート". TWITTER. 2015-8-26.  
[HTTPS://TWITTER.COM/KAMAKURA\\_TOSYOK/STATUS/636329967668695040?REF\\_SRC=TWSRC%5ETFW](https://twitter.com/kamakura_tosyok/status/636329967668695040?ref_src=twsrc%5etfw), (2017-1-12).
- 7) 子どもの読書サポーターズ会議. "これからの学校図書館の活用の在り方等について(報告)". 文部科学省. 2009-3.  
[HTTP://WWW.MEXT.GO.JP/A\\_MENU/SHOTOU/DOKUSHO/MEETING/\\_ICFILES/AFIELDDFILE/2009/05/08/1236373\\_1.PDF](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/_icsfiles/afielddfile/2009/05/08/1236373_1.pdf), (2017-1-12).
- 8) 塩見昇ほか. 学習社会・情報社会における学校図書館. 風間書房, 2004, 296P.
- 9) 全国学校図書館協議会. "学校図書館憲章". 全国学校図書館協議会. 2016-6-3.  
[HTTP://WWW.J-SLA.OR.JP/MATERIAL/SLA/POST-33.HTML](http://www.j-sla.or.jp/material/sla/post-33.html), (2017-1-12).
- 10) 全国学校図書館協議会編. データに見る今日の学校図書館 '99~'03:学校図書館

- 白書. 全国学校図書館協議会, 2004, 120P.
- 11) 高田房枝, 若林直子, 小島隆矢. サードプレイスの再定義と類型化の指針に関する検討. 日本建築学会大会学術講演梗概集. 2015, VOL.2015, NO.9, P.35-36.
  - 12) 中島喜代子, 小長井明美, 木屋真依. 世代間比較からみた子どもの居場所に関する研究:個人的居場所の場合. 三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学. 2006, VOL.57, P.63-79.
  - 13) 宮下敏恵, 石川もよ子. 小学校・中学校における心の居場所に関する研究. 上越教育大学研究紀要. 2005, VOL.24, NO.2, P.783-800.
  - 14) 文部科学省. "文部科学省事業評価書－平成 21 年度新規・拡充等－16.学校図書館の活性化推進総合事業（新規）". 文部科学省. 2008-8.  
[HTTP://WWW.MEXT.GO.JP/A\\_MENU/HYOUKA/KEKKA/08100105/004/016.HTM](http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100105/004/016.htm), (2017-1-12).
  - 15) 文部科学省児童生徒課. "平成 28 年度「学校図書館の現状に関する調査」結果について（概要）". 文部科学省. 16-10-13.  
[HTTP://WWW.MEXT.GO.JP/A\\_MENU/SHOTOU/DOKUSHO/LINK/\\_ICFILES/AFIELDDFILE/2016/10/13/1378073\\_01.PDF](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/_icsfiles/afielddfile/2016/10/13/1378073_01.pdf), (2017-1-12).
  - 16) レイ・オールデンバーグ. サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」. みすず書房, 2013, 528P.
  - 17) 久野和子. 「第三の場」としての学校図書館. 図書館界. 2011, VOL.63, NO.4, P.296-313.
  - 18) 宮本崇志. 学校図書館の空間をどうデザインするか:みんなのひろば:教室でない教室. 学校図書館. 2013, VOL.747, P.29-31.
  - 19) 近藤由紀彦. 学校図書館の空間をどうデザインするか:図書・メディアセンターを中心に据えた学びの空間. 学校図書館. 2013, VOL.747, P.25-28.
  - 20) 山下知里. 学校図書館の空間をどうデザインするか:生徒の生活動線を図書館につなげる:「スクールプロジェクト」による図書館プランづくり. 学校図書館. 2013, VOL.747, P.39-42.
  - 21) 市川久美子. 学校図書館の空間をどうデザインするか:図書館コンセプト&レイアウトデザイン案. 学校図書館. 2013, VOL.747, P.45-47.

- 22) 石本雄真. こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所:精神的健康および本来感、自己有用感との関連から. カウンセリング研究. 2010, VOL.43, NO.1, P.72-78.
- 23) 石本雄真. 居場所概念の普及およびその研究と課題. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要. 2009, VOL.3, NO.1, P.93-100.
- 24) 石本雄真. 個人的居場所と社会的居場所の機能の違い:心理的 WELL-BEING との関連を通して. 神戸大学発達・臨床心理学研究. 2006, VOL.5, P.61-69.
- 25) 毎日新聞. "被害の女子生徒、損害求め地裁に提訴 奥出雲 /島根". 毎日新聞. 2016-12-20.  
[HTTP://MAINICHI.JP/ARTICLES/20161220/DDL/K32/040/420000C](http://mainichi.jp/articles/20161220/DDL/K32/040/420000C),  
(2017-1-12).
- 26) 村上京子. 学校図書館における心の居場所づくり:開発的カウンセリングプログラムの作成、実施を通して. 長期研修講座研究集録. 2009, VOL.2009, P.1-4.
- 27) 竹内健吾. 学校図書館の空間をどうデザインするか:読書センター機能の充実を目ざして. 学校図書館. 2013, VOL.747, P.33-36.
- 28) 天野 英幸. 学校図書館の空間をどうデザインするか:棚は生きている. 学校図書館. 2013, VOL.747, P.16-18.
- 29) 萩原常夫. 学校図書館の空間をどうデザインするか:学校全体が図書館. 学校図書館. 2013, VOL.747, P.21-23.
- 30) 文部科学省, 厚生労働省. "放課後子ども総合プランについて:学校・家庭・地域をつなぐ". SCHOOL HOME COMMUNITY:学校・家庭・地域をつなぐ. ○-○-○. [HTTP://MANABI-MIRAI.MEXT.GO.JP/HOUKAGO/PROPULSION.HTML](http://manabi-mirai.mext.go.jp/houkago/propulsion.html), (2017-1-12).
- 31) 文部科学省コミュニケーション教育推進会議. "子どもたちのコミュニケーション能力を育むために:「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組". 文部科学省. 2011-8-29.  
[HTTP://WWW.MEXT.GO.JP/B\\_MENU/HOUDOU/23/08/\\_ICSFILES/AFIELLDFILE/2011/08/30/1310607\\_2.PDF](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsfiles/afielldfile/2011/08/30/1310607_2.pdf), (2017-1-12).